

# 人修羅のヒーローアカデミア

ストラディバリウス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ルシファア閣下に転生させられた哀れな魂は未知の世界にて産まれなおす。

東京受胎は起こらず、街は平和そのもの。

人修羅として生まれ変わった魂はしかし、違和感では済ませられない差異をこの世界から感じとった。

僕のヒーローアカデミアを知らない転生者が人修羅としてこの世界で生き残ることを目標に、混沌王ルートを必死に回避する物語です。

捏造考察などを主人公が多々ありますが、それがこの世界の真実であるかは閣下のみぞ知る、となることが多いです。

# 目次

魔人、始動	1
世界の認識	9
英雄願望	16
実戦と実践	22
閑話 傲慢と矛盾	29
矜持と誇り	32
権能の範囲	39
老紳士と喪服の淑女	47
アクマとヒト	54
自身とコトワリ	61
再会と新たな仮説	68
クラスメートと仲魔	74
戦闘訓練と覚醒段階	81

## 魔人、始動

鼓動を感じる。蠢く臓器の音が聞こえる。温もりと安らぎが自分を包んでいる。

ああ、永遠にここに居られたらいいのに。まどろみの中、遠い日に経験した自宅の布団の居心地の良さを想う。

いや、待て。

……遠い日？では俺はどこに居るのだというのだ。いや、そもそも俺は誰だ？

意識が覚醒していく。

ここはどこだ。何も見えない。狭い所で蹲っているようだ。

試しに手や足を伸ばしてみると、何らかの皮膜(?)に遮られた。周囲は完全に膜に覆われており、暗く、更に体感から言うと液体に満たされている。意識してみれば、自分は息をしていないという事実に愕然とした。

手足を動かしていると、紐のようなものに接触する。その紐は皮膜まで伸びており、それを辿っていくと、自分の腹に繋がっている。

なるほど。これはへその緒だ。自分は子宮に宿った胎児であり、この鳴り止まぬ鼓動は母体の心臓の音か。

記憶が曖昧だが、俺は社会人として生きていた記憶がある。自分の名前も思い出せないが、漠然とした常識や知識は確かに記憶に残っている。

つまり、自分は死に、輪廻転生をしたというのか？

いや、赤子の脳は生まれてから、外部からの刺激によって発達していくと聞く。

胎児の状態ではここまで複雑な考察など出来るはずがない。

自分の記憶している常識と現状の辻褄が合わない。更に言えば、手足が届くとは言え、この子宮内はそこまで手狭ではない。つまり、胎児の大きさから言って、出産まではそれなりの猶予があるということだ。それでここまで複雑な思考能力を有してる時点で常識など当てにならない。

自分の記憶にある常識を疑い始めてからひと時経つと、唐突に一つの記憶が脳裏に蘇った。

病院の白い廊下。金縛りのように動かない自分の身体。正面に現れた人外の美貌を持つ黒いスーツを身に纏った金髪の少年と隣に立つ喪服姿の老婆。

老婆は帽子から垂れるヴェールでその素顔を窺うことはできないが、子供の方は尋常の者とは一線を画す気配を放っている。

ああ、少年が近付いてくる。

「ふふ、ご安心くださいませ。この世界は受胎する事は在りません。

しかし、貴方は光栄にも坊ちやまに選ばれました。」

この老婆は何を言っているんだ。これじゃあ、まるで真・女神転生IIIの冒頭のシーンの再現じゃないか。

ゲームが現実になったとか、ありえないだとか、そんな事はこの状況を好転させる要素に掠りもしないので、速攻頭から追い出した。解決策を考えようとしても、全身が逃げろと危険信号を発して邪魔をする。煩い、動けないんだよ！

「数多に存在するアマラ宇宙には数奇な道を辿っている世界があります。混沌王となる存在は確定しているにも拘らず、坊ちやまの試みは未だ成功していません。」

おい、この流れは良くない。良くないぞ。俺がここで彼女から話を聞いている張本人なのがマズイ。

聞き耳を立てている他人ならまだ、いくらか対処法は在っただろうか。

「通常の世界では決して到達できない存在へ至るには、坊ちゃんも変わった手段をとらざるを得なくなつたのです」

良くない事が確実に起こる。しかも残念な事に、それは俺では不可避の出来事だ。

「…動いてはいけません。」

「…痛いのは一瞬だけです…」

ああ、少年が小さな蠢くモノを手に持っている。

「……………これでキミはアクマになるんだ……………」

異物を飲み込む嫌悪感とナカから身体が作り変えられていく悍ましさと痛みを耐え切れず意識を失う直前、金髪の少年の口が小さく釣りあがったのを目撃した。

・

・

・

あれは現実だったのか？

いや、嘘だと仮定しても始まらない。最悪を想定して考えなければ、二度目の命を失う事になる。

もし仮に自分が金髪の少年ヘルシファーに悪魔の力が秘められた虫状の物体へマガタマを飲み込ませられたのなら、俺は魔人へ人修羅となったのだろう。

全ての悪魔の頂点に立つ〈混沌王〉へと至る可能性を持つ、ほぼ最弱の悪魔へと。

そう、最弱の悪魔だ。具体的には〈ガキパト〉と言う造語に終結する。

真・女神転生IIIというゲームを高難易度でプレイする場合、序盤の戦闘でゲームオーバーになる事は珍しくない。

相手はゲーム中最弱の悪魔、〈ガキ〉である。〈パト〉とはパトラッシュの略で、ゲームオーバーの演出がアニメ「フランダースの犬」の最終回に酷似したムービーが流れることから名づけられているが、今は関係ないので深くは語らないでおこう。

人修羅は一对一でこの〈ガキ〉と戦う訳だが、高確率で負ける。仲間も有効なスキルも無い最序盤とはいえ、イベント戦闘のような強制タイムンで負けるのはとても悲しいものがある。

まあ、つまり何が言いたいのかと言うと、対策を怠れば死ぬということだ。性質が悪い事に、対策をしても死ぬ時は死ぬということだ。

だから、最悪を想定しなければならない。

現状の把握から始めよう。老婆は東京受胎は「無い」といった。つまり……この状況は通常の受胎なのか？

この件は現在分らないから保留だな。次に自分の状態の把握だ。意識してみれば、確かにへマガタマ、つまり禍魂を体内に感じられる。意識を向けられて嬉しいのか、ピクピク蠢いている。これはカワイイのだろうか？

ゲームでも主人公である人修羅が初期に装備していたへマロガレ、というへマガタマのようだが、違和感を感じる。だが現時点ではこの違和感の正体は分かりようがない。

へマガタマよりもたらされる悪魔の力は様々だが、それを引き出すためにはマガツヒ、或いは生体マグネタイト、通称MAGを体内に取り込み、成長する必要がある。

人の強い感情などから発生するエネルギーのようなものであり、成長にこれが必要なのは悪魔が情報生命体である事が関係している。

情報生命体である悪魔はその存在の情報量に依じてこのMAGを常時消費し続ける事となる。言い換えれば、これが無ければ悪魔は地上でその存在を維持できなくなる。

消費量は魂の器の大きさによって決まり、大物悪魔であれば生半可な事では地上に光臨できないというわけだ。

現状、魂の器がミジンコレベルの雑魚である俺は、へマガタマの力を引き出すためにもMAGを集める必要がある。

方法としては三つ。一つ目は食事。人間をマルカジリすれば、恐怖の感情でMAGも増幅してお手軽だな！

……却下だ。生き残るために自分から人間の心を捨てれば、へ混沌王ルートまっしぐらである。

二つ目は戦闘。相手を殺さない場合であっても、相手の心を屈服させた場合、一定量のMAGが手に入る。邪悪な悪魔であれば、殺す事も視野に入れなければならないだろう。殺すことはいけないことだ等と言う常識に縛られていたら生き残れるものも生き残れない。

三つ目は自然吸収だ。高濃度のMAGに晒されていれば、無意識の内にいくらかは吸収される。一般人が覚醒して異能に目覚めたり

するもの、このパターンが存在するとか。

胎児であり、無力な現状、母体のMAGを少量吸収する以外道はなさそうだ。

意識して吸収できないだろうか？ああ、それはスキル〈吸魔〉と統合されるのか。

…!!? 〈マガタマ〉から情報が頭に流れてきたのか！

虫のようだとは思っていたが、情報の共有まで出来るのか……

なら、スキルのことや違和感についても情報のすりあわせを行うか。

…

…

…

うむ、期待していなかったが、やり取りできる情報はあくまで〈マガタマ〉の能力についてであって、ルシファー閣下や謎の老婆、この母体などについては返答が得られなかった。

新たに得た情報としては、この〈マガタマ〉は俺の成長に合わせて自らの性質を変える力を得ていく事、そして想像通り魂の器の増幅（ゲームで言うところのレベルアップだな）に併せて新たに異能を扱えるようになるという事だ。

異能とはゲームのスキルの事だろう。人修羅が最序盤で習得する初期スキル〈突撃〉は使い勝手が微妙な割りに、三レベルでやっと覚えたはずだ。簡単に有用なスキルが手に入るとは思わないほうがいいだろう。地道にMAGを集めていくしか無さそうだ。

問題は〈マガタマ〉の性質変化だ。予想が正しければ、これは〈マガレ〉以外の〈マガタマ〉の性質を自動で習得していくということだ。

ゲームでは新たな〈マガタマ〉を求めての探索も大変だった記憶があるので、非常に助かるわけだが、裏がありそうで、怖いのも事実。つまり、外は探索できないような世界なのか？いや、疑い出したら



キリが無いな、やめよう。

今はこの身体に慣れていき、この世界に備えるしかない。人修羅は低レベルの内は鍛えた人間とそこまで差がある能力は無かったはずだ。生き残るためにも、この身体に馴染み、自分にできる事の把握、今後のプランを練る、生き残るといいう大目標のほかに小目標の設定、出産までやることは少なくない。

後悔の無いように、できる事は全てやろう。

...

...

...

「阿久間さん、頑張ってください、もう少しです！」

「千晶！」

「ヒツヒ、フーツ、ヒツヒ、フーツ！」

せ、狭い狭い！いや、子宮内もそろそろ狭くて苦しかったがこりやおかしいって！

出るように出来てないだろ！頭が割れる！明らかに面積の大きさの設計間違っている！

「よし、出てきた、ひっぱります！旦那さんは奥さんの手を応援してて」

「あ、おおっ！」

ぎゃああ、頭が変形してる、体引っ張るな、痛いんだよ、そういう風に来てねえんだよ！

「おめでとうございます、元気な男の子です！」

「はは、元気に泣いてまあ、千晶の勝気な性格に似たのか？」

「フーツ、フーツ、勇、あとで覚えてなさい、フーツ、フーツ」

い、痛い！最初の呼吸をしたら肺まで全て焼けるように！

頭の鋭い痛みも治まらないし、身体も全身痛いし、中まで痛い！

初めて呼吸器官を使ったからか？いや、待て！じゃあ消化器官も同じなのか？や、やめてくれ！

「ふふふ、夫婦仲がいいのはよろしいですが、そろそろお別れの時間です。次の面会は明日になると思うので、旦那さんは受付で予約してくださいね」

「ん、そっか。頑張ったね、千晶。ありがとう」

「ふん、こんなの朝飯前なのよ、フウ、フウ」

痛みのピークは過ぎた。俺は今、必死になって泣いていた自分に気づき、落ち着くことに意識を割いている。体は赤子のそれだ、意識が俺であっても感情の揺り幅次第ですぐに泣くようだ。

目を開けても周りが恐ろしくぼやけてて何も見えない。音は拾えているが、しつかり認識されていない。まるで普通の人間の赤ん坊のようだ。

いや、まてよ。もしかすると今までののは全て妄想で、俺は実は普通の人間の赤ん坊なのかも！

いや、転生者が普通であるかは置いておくとしてだ。

「OK、有給は取ってあるから千晶も安心して。」

でも、異形型とはびつくりだね、全身タトゥーみたいでかつこい「あら、個性発動した後の私達の姿よりは人間してるわよ」

「ははは、違うないね！」

「（よかった、異形型は未だに偏見が強いつて聞くけど、この夫婦は大丈夫そうね）」

「あら？首の後ろに小さな突起があるわね。」

「じゃ、またな、千晶」

「ええ、またね、勇」

ふははは、俺の取り越し苦労なら何の問題も無い！

雰囲気的にここは明らかに病院だし、俺を抱えているのは病院関係者だろう。

特に俺について大声で言い合っている様子もないし、抱いている仕草はとても自然だ。

何より、周りから放たれているマガツヒ、つまりMAGは非常に穏やかだ！

普通でない見た目の赤子に向けるものではない。つまり俺は人修羅ではないということだ！

「阿久間さん、名前は決まっていますか？」

「ええ、勇と一緒に決めていたの。人修羅、これがこの子の名前よ」

……あれ？

## 世界の認識

人修羅、7才学生です。

アホか。初めて自分の名前を認識したときは愕然としたわ。当時自分の親は所謂キラキラネームをつけるようなゆるふわ価値観なのかと絶望したものだ。

しかし、保育園に行き始めると、俺の予想は大きく覆された。そう、かつての俺が過ごしていたであろう日本とここは似て非なる世界なのだ。

俺の周りには火之矢やら剛拳姫やら、ロックでアナーキーな名前だらけだった。そしてこの世界では異能を持つことが当たり前であり、どうもそれぞれの名前はその姿や能力と密接な関係にある事が分かってきた。

もつと言えば世界はMAGで覆われており、いつ低級悪魔が現れても可笑しくない環境にも関わらず、そういう話は聞いたことがない。つまり、この世界では悪魔の替わりに人がMAGに強い影響を受けており、異界化しても可笑しくないほどの濃密なMAGはそのままだに〈悪魔〉としての側面も与えたようだ。

更に踏み込むなら、この世界の人は〈名〉に存在を縛られると言うことだ。

火の異能を発現させる者は火に関連した名を、肉体強化の異能を発現する者はそれに関連した名を付けられる、といった具合だ。もちろん名が先か、そのような異能ゆえ、相応しい名を自然と与えられるのかまでは分からないが。

そして驚いたことに、悪魔の姿をした異形の人間が多数存在しており、それらが（表面上とは言え）社会的に受け入れられているのだ。これらは通常の異能者と比べ肉体的に優れており、より強く悪魔としての側面を感じる。悪魔と人間が〈悪魔合体〉した〈悪魔人〉が近いだろうか？

思考が逸れてしまったが、何が言いたいかと言うと、遺憾なことに俺の名は必然だったということになる。

ああ、クソだ。名字もふざけている。何だ、阿久間って。まんま悪魔じゃないか。悪魔人修羅、コンゴトモヨロシクってか？

俺の両親は二人とも変化型の異能、いや、この世界に合わせて言うなら「個性」か、を持っている。

真・女神転生IIIでは主人公の友人でありながら最終的に敵対してしまう新田勇と橘千晶……に似た二人だ。

阿久間夫妻は容姿もゲームの二人に似ており、個性を発動するとゲーム中の神と一体化する前の段階の姿となる。

つまり、父勇は全身に蠢く白い顔が現れ、それぞれに意思があるかのごとく声のようなものを発する個性。キモイが特別な能力は特に無い。そして母千晶はより人から逸脱している姿となる。髪は白くなり、右腕は不定のモノと成り、時に鋭い剣のような姿をとれるようになり、首から口元にかけてマスクのような黒い布のようなものに覆われる。

そんな二人だからこそ、俺の人修羅としての姿を受け入れてくれたのだろう。俺の見た目だが、全身に黒の直線のような文様がタトゥーのように広がっており、それらを深緑の線が縁取っている。この緑の線は暗闇だと発光する性質を持っており、更に俺の感情に呼応するように光を強める。寝るとき邪魔でしようがない。いや、その程度で寝れないほど柔な精神はしていないが、気分的に暗闇で寝たいものなのだ。

更に俺の首の後ろには棘のような黒い突起が存在する。赤子の時は小さく、更に軟骨のように柔らかかったらしいが、成長するにつれて硬くなり、原作の人修羅のように一目で分かりやすい大きさまで成長した。

さて、話は変わるが、俺が認識したこの世界についての情報を整理しよう。

まず、異界化してもおかしくない程度には世界にMAGが満ちており、世界には悪魔の変わりに人が異能「個性」を発現し、適応している。人々は無意識に空気中のMAGを吸収しており、適性のあるものは魂の器「レベル」を拡張していくようだ。

また、特異な才能を持つものは、手段は分からないが、強大なMAGを保有している。俺が調べた限り、この世界で最大の〈レベル〉を持つ存在は〈オールマイト〉というヒーローだ。

ああ、そうだ、ヒーロー。この世界で俺が直面したもう一つのギャップだ。この世界ではヒーローとヴィランが当たり前のように存在し、日々アメリカンコミックの如く争い合っている。恐ろしい事に社会的にこれらは常識として受け入れられており、〈プロヒーロー〉なる冗談のような制度まで存在する。

話を戻すが、そのヒーローたちの中でも一線を画す伝説の存在が居る。それこそが〈オールマイト〉、ナンバーワンヒーローにして完全無欠の大英雄だ。彼の膨大なMAGをテレビ越しに見たときは冗談抜きに腰を抜かした程だ。少なく見積もっても五十レベルオーバー。女神転生シリーズで言うところの終盤の敵の強さである。バグにも程がある。世界終末案件を疑ったほどだ。

実際の所、彼は真つ当にヴィランを無数に倒す事でレベリングしていたと俺は予想している。元々強かったという話も聞くが、それはあの膨大なMAGの説明が付かない。何らかの儀式によるイレギュラーだろうか？何れにせよ、彼が唯一の例外だと考えるのは楽観視が過ぎるというものだ。確実にオールマイトに匹敵するバケモノが世界には複数存在すると認識したほうがいいだろう。鬱だ。

俺は地道に周囲のMAGを吸収し続けている。目下の目標は〈エアライズ〉の習得だ。習得は四レベル、最序盤のスキルにして、生き残る上で最重要とっていいスキルの一つだ。相手の能力や相性を調べる事は真・女神転生において必須事項であり、怠れば高レベルプレイヤーであっても即ゲームオーバーとなるのは珍しくない。

俺は現在〈突撃〉を習得し、三レベル相当まで強くなった。この〈突撃〉、ゲームではHP、所謂生命力を消費して発動する技であるにも関わらず、威力が低く微妙な性能であった。しかし、実際に使ってみた所、体力を大幅に消耗する代わりに、軽く空中に浮き爆発的な突進力で前方に移動する技であった。初めて使ったときは盛大に転んだのは言うまでもない。かすり傷で済んだのは非常に運が良かった

のはもちろんの事、レベルアップによる身体能力の上昇も決して無関係ではないだろう。

嬉しい誤算としては、この〈突進〉空中でも発動可能であり、受身さえ怠らなければ非常に有用な回避兼逃亡手段になると言う事実だ。間違っても当分は正面から誰かと戦う気はない。俺は自分を知っている。三レベルの人修羅は雑魚であり、更に俺の身体は7歳児相当の体格だ。精神は一般人の俺だし、楽観視する要素はどこにも無い。

さて、そんな〈スキル〉を習得し、確実に人間の範疇から外れつつある俺も、この世界では〈個性〉を持つただの子供だ。ではこの世界で個人の〈個性〉はどのように判別されるのか？何と病院で診断されると言うのだ。

五歳辺りで例に漏れず、病院へ行き専門の医者診断された俺の結果は個性〈悪魔〉。悪魔っぽいことができる個性だそうだ。フアジーだな、おい！そのうち契約できたり火を吐いたりできるんじゃないですかねえとか適当言っていた医者はヤブなのか有能なのか判断が付かない。

ああ、ヴィランをシバキ倒して楽にMAGを手に入れたい。しかし、この方法は明らかにルシファーが意図的に作った罠だ。真・女神転生に共通して存在するものに〈属性〉、または〈アライメント〉と言われるものがある。これは主人公の行動を元にシナリオが〈カオス〉、〈ニュートラル〉、そして〈ロウ〉ルートに分かれると言うものだ。〈カオス〉は基本弱肉強食を是とする思想、〈ロウ〉は秩序による統治とそれに従わない者を排除する思想、そしてどちらでもない或いはそのどちらの要素も併せ持つ思想である〈ニュートラル〉の三つの道。

プロヒーローにならずにヴィランを退治するヴィジランテと言う道は明らかに秩序から外れた行いである。〈カオス〉ルートはヴィランになる事が条件だと思うので、ヴィジランテは恐らく〈ニュートラル〉ルートの条件なのだろう。しかし、俺が恐れている〈混沌王〉へと至る条件がゲームでは世界のルールから逸れ、全ての敵を倒してい

くと言うものであり、これは〈ヴィラン〉、〈ヴィジランテ〉両方に共通するものだ。

ルシファーに見初められた者が一般人として生きていけるはずが無い。俺は確実に面倒事に巻き込まれるだろう。ならば敵を倒しつつも秩序から逸脱しない選択肢は一つしかない。

俺は、プロヒーローになる！

・  
・  
・

「ふふふ、聞いた？人修羅ったら将来ヒーローになるんだってさ」

「ははは、初めてオールマイトをテレビで見た時、衝撃のあまり固まっていたからなあ。」

やっぱり時代はヒーローなのかねえ」

部屋で寝ようとしていると、一階のリビングから両親の話し声が聞こえる。成長するにつれて悪魔としての能力が五感の強化という形でも現れ始めている。

「あの子も男の子なんだよ。思うところあったんじゃない、幼いながらにさ」

「頭いいもんなあ修羅坊。そこは千晶に似て本当に良かったよ」

「どういう意味よ、それ。性格は似なくて良かったって言いたいわけ？」

「千晶、ストップ、ストップ！こんな所で個性使わないでくれ！」

今日も両親は仲が良くて何よりだ。五感の精度も少しずつコントロールできるようになってきているし、このように意図せず聞きたくも無いものや見たくも無いものを見ることも減っていくだろう。両親が子供に隠れていることなどに興味はないし、精神的にも疲れるので早く完璧に使いこなしたいものだ。

話は変わるが、学校で少し浮いていた俺に、最近はお仲のいい子が出来たのだ。



彼女の名は八百万百、所謂お嬢様だ。実は母千晶の実家はそれなりの家であり、彼女自身もお嬢様だったりする。つまり、俺も良い所の坊ちゃんであり、通っている学校も金持ちのお子さんが多い所なのだ。

関係ないが父勇は婿養子だったりする。阿久間って母さんの苗字かよお！納得だよ！

まあ、兎も角、人修羅で転生者の俺にも漸く友人と呼べる存在が出来たのだ。異性なのは気になる所だが、女子と男子でグループ派閥が別れるまでは猶予があるはず。それまでに男子の友人も作ればいいのだ。

彼女は年齢のわりに聡明ではあるが、世間知らずの箱入り娘でもある。好奇心旺盛で無邪気なため、比較的無口で大人しい俺相手でもグイグイ来てくれる。

そこは非常にありがたいのだが、名前と個性は厄ネタの香りが僅かに漂っている。日本人にとって八百万と言えば当然八百万の神がまじり思いつくだろう。神道の神全般を指す言葉が苗字に入っている。名前もそれを補強している。そして、個性は創造系であり、目立った制限が無い。恐ろしい権能だ。神は数あれど、万能の創造能力を持つものなど、上位にしか存在しない。即ち、原初の神や主神、天地の創造神である。

彼女はそのような上位悪魔の権能を個性として持っているのだ。彼女との接触の影にルシファーが見え隠れする。

だが、それに振り回されて友好関係を諦めたり、選び直すのは何か違う気がする。切欠がどうであれ、俺は彼女の事を好ましい人物だと認識したし、彼女の友情には誠実に答えたいと思っている。これには小学生の女児の純粋な気持ちを踏みにじりたくないと言う俺の良心も多分に含まれている。

そもそも俺はこれまで見た目が怖く、無口なものもあり、あまり友好関係と言うものを築けていなかったのだ。

以前、笑顔で話しかける事を心がけてみたら、泣かれた事もある。鏡で確認したところ、邪悪でニヒルな笑みを浮かべた幼い人修羅がそ

ここに映っていた。幼い時にこんなのに話しかけられたら俺でも泣く。そんな訳で、希少な友人粋をこんな理由で失いたくは無い。彼女を通じて他の子達とも仲良くなれる可能性も多分にある。色んな事柄について質問しまくる八百万に答えていくという形ではあるが、いい感じに仲良く出来ていると思う。そう、俺の未来は明るいのだ。

ふふふ、友達もできたし、秩序の道を志す俺が混沌王へ至るなどありえないな！

勝ったなガハハ、風呂入ってくる！

## 英雄願望

小学校、中学校と過ごして来た訳だが、結論から言うと八百万以外の親しい友人を作る事は叶わなかった。いや、努力はしたのだ。実際、声をかければ周りの人たちは対応してくれるし、業務連絡なら相手側から話しかけてくれる事もある。しかし、終ぞ彼らとは友人と呼べるような間柄には成れなかった。

原因は分かっている。一つは俺のコミュニケーション能力の不足だ。女神転生の主人公達の例に漏れず、俺も割かし無口な傾向にある。閣下が俺を選んだ基準がこれなら泣けてくるが、兎に角この風貌、保有MAGの上昇による威圧感の増加、そして無愛想が合わさり、自分から関わりたくない人へと俺を進化させた。いや、実際は確実に退化なのだが。

もう一つの要因は何を隠そう、俺の唯一の友人である八百万百の存在だ。彼女はフレンドリーで、世間知らずではあるが、基本的に人との関わりに飢えている印象を受ける。お嬢様として育てられているであろうことは想像に難しくなく、俺と会話している時意外は基本、模範的なお嬢様の態度を貫いている。

家の方針に従っているのは確実なのだが、俺が相手だと幼少のやり取りを引っ張っているのか、素の自分が出てしまうようだ。当然、周りの人は面白くない。何故なら彼女はこの数年で美しく成長したからだ。

俺は彼女の成長を微笑ましく見守っているし、知り合いの娘さんが大きくなった時のように感慨深く感じているのだが、周囲からしたら皆の憧れの令嬢に一人だけ特別扱いされる馬の骨となるわけだ。いや、俺も坊ちゃんには代わらないが、周りからすればうちは祖父の代で会社が大きくなっただけの歴史の無い成金だ。

流石に露骨な虐めは発生しなかったが、そんな俺に態々接触しようと言う奇特な人は現れることは無かった。

ああ、俺の相棒枠はどこだ。女神転生やペルソナでは居るものだろう？まさか八百万が人修羅の相棒、へピクシー枠だとも言うのでは

あるまいな。彼女を閣下の計画に巻き込むのは断固反対だ。彼女はそのまま純粹さを失わず、順調にお嬢様として生きていき、俺との思いは時間と共に色あせて行つて、最終的に素敵な男性と結婚するのがお似合いだ。闘争など持つての外だ。

さて、俺は生まれてからずっと来るべき戦いに備え、鍛え続けてきた。そして〈混沌王〉へと至る道を必死に排除しようと躍起になってきた。では、俺は何故ここまで〈混沌王〉を禁忌するのか。それは人修羅が〈混沌王〉へと至る過程で人間性とも呼べるものをそぎ落としていくからだ。戦いに次ぐ戦いの果てに人修羅の心は完全に悪魔と成り果て、その圧倒的能力とカリスマで悪魔の軍勢を率いてメシアの神に最終決戦を挑みに行くというのが真・女神転生IIIにおける〈混沌王〉の結末である。所謂アマラエンドとも呼ばれる結末だ。

俺は自分の心を失うつもりも、悪魔の軍勢を率いるつもりも、ましてやメシアの神に喧嘩を売るつもりも毛頭ない。故に〈混沌王〉に至るような可能性がある行動は極力避けてきたし、今後も避けていく所存だ。

ここで問題になるのが俺の運命だ。恐らく闘争は避けて通れないだろう。当然、この闘争を生き残るためには力が要る。力を得るためにはMAGが必要であり、その為には他者から奪い取るのが手っ取り早い。しかし、その行いの結果、〈混沌王〉ルートが不可避になると言う事実が立ちはだかる。では、どうするか。

俺とて、この数年をただ無為に時間を過ごしていたわけではない。身に付けたスキルをより効率的に扱う訓練をしている時に気付いたのだ。自分の保有MAGが日常の吸収量を明らかに上回っている事を。

検証を重ねた結果、自分が見落としていた要素が判明した。悪魔は情報生命体であるため、強くなる方法が限られており、MAGを多く吸収するか、ゲームで登場する邪法〈悪魔合体〉以外ではほぼ成長できない。

では人間はどうだ。そう、人間は悪魔と違い、肉の体を持っている。つまり、保有MAGの容量を上昇させるために肉体を鍛錬する事も有

効なのだ。俺は自分が人修羅になったことで〈悪魔〉のような情報生命体になったと思込んでいた。しかし、よく考えてみれば肉体を持つ両親から普通に生まれたのだ。〈マガタマ〉を身体に宿しているとは言え、肉の身体を持っているのだ。

その結論に達してからは言うまでもないだろう。俺はストイックに訓練を始めた。小学生当時の周囲の反応がこれだ。

「おお、修羅坊がヒーロー熱に！熱血してるなあ。無理の無いようになー」

「ふふ、人修羅つたらあんなに真剣に何かに打ち込むのなんて初めてじゃない？」

ちよつと心配だったけど、安心したわ」

「お兄様、最近すぐに帰られてしまいますが、何かあったのですか？

まあ、ヒーローになる訓練を始めた？まあ！私もお手伝いできる事があれば何でも言って下さいね」

ちなみに、八百万のお兄様呼びは今も更正できていない。いや、確かに俺の方が誕生日は先だが、彼女の中では俺は色々疑問に答えてくれる知り合いのお兄さん枠にでも納まってしまったのだろう。多分だが。明らかにこれも俺が孤立している原因だ。

そして訓練を続ける事九年。中学最後の年である現在、俺の保有MAGはついに二十レベル相当になった。使えるスキルも回復、攻撃、補助と一通り使えるようになり、〈アナライズ〉は習得したその瞬間から今に至るまでほぼ常時発動状態だ。知らない人物が居た場合、ほぼ無意識に〈アナライズ〉を行っている。攻撃スキルの要は〈ファイアブレス〉と〈アイスブレス〉だ。どちらも制圧力に優れた範囲攻撃であり、〈火炎高揚〉と〈氷結高揚〉のパッシブ効果で威力が増している。が、弱点が無いわけではない。

人修羅の序盤のスキル全般に言えることだが、精密性にかけるのだ。物理攻撃の〈暴れまくり〉は上記の二つのブレス同様味方を巻き込みかねないし、周囲に暴風を発生させる〈竜巻〉や範囲に熱風の衝撃波を放つ〈ヒートウェイブ〉も同じだ。多対一に優れている反面、味

方との連携がし辛く、一対一で使用する場合、隙が大きいため使い所を考えなければならぬ。いかにも悪魔としての力に振り回されている序盤の人修羅らしいスキルのラインナップだ。

補助スキルでは〈タルンダ〉による敵の攻撃力の低下と〈スクンダ〉による敏捷性の低下が非常に大きい。これらのスキルは重ねがけも可能で、強敵であっても弱体化すれば取れる選択肢は大きく異なってくる。使い辛いスキルとしては〈挑発〉が挙げられる。敵を怒らせ、攻撃力を上昇させる代わりに防御力を低下させると言うもの。使い所を考えないと逆に追い詰められそうだ。

一番嬉しいスキル筆頭は回復スキルの〈ティア〉、そして次点が敵から逃走する場合、素早さを上げてくれる〈逃走加速〉のスキルだ。〈ティア〉は部位欠損レベルの傷は治せないが、切り傷や打撲程度なら瞬時に癒してくれる。どちらも生存率を大幅に上げてくれる、切り札的な能力だ。

これでも木っ端のヴィランには引けをとらない自信があるし、プロヒーローの名門〈雄英高校〉の狭き門も突破できると確信している。だが、あまりにも静かだ。不気味なほどにトラブルらしいトラブルはこの九年間発生しなかった。これで俺の心配事が全て杞憂だったと思うのはあまりにも平和ボケ的思考だ。女神転生シリーズ及びペルソナシリーズの主人公達が巻き込まれる年齢は大体高校生の時なのだ。むしろここからが本番。そう思うと手が震えてくる。これが武者震いだと言えればどれほど良かったか。

恐らく、俺はこの高校で未曾有の危機に遭遇する。そしてそれは世界を巻き込みかねない規模になるだろう。傍観者に徹し、他人に解決して貰うスタンスを取ろうものなら、犠牲が多数発生するか、或いはそもそもそんなスタンス事態が不可能かであろう事が予測できる。どこまでが閣下の演出で、どこまでが俺の運命なのかは知らないが、確信に近い予感がある。

俺の〈人修羅〉としての人生の本番はこれから始まるのだと。

・  
・  
・

やってきました、雄英高校。〈オールマイイト〉の出身校にして最も競争率の高いヒーロー育成高校だ。

でかいな、無駄に。大学でも、もう少し控えめだと思う。金をかけている事もそうだが、この世界の〈ヒーロー〉の社会的信用度及びヒエラルキーが視覚化されている気がする。

さて、雄英高校へ入学する条件は筆記及び実技試験で合格すること。非常に分かりやすく個人的にはいいと思う。

周囲を見回すと、俺のように学園の大きさに圧倒されている者も居れば、まっすぐ試験会場へと吸い込まれていく者もいる。中には友達同士で受験しに来たのか、お喋りに興じている者まで居る。まあ、試験までの時間はまだ余裕があるのだから、まったく問題は無いのだが。

ここで漫画とかなら八百万辺りとぼったり出合って、「何でここに!?'なんて展開になるんだろうが、幸いな事に、そんな事は起きなかった。彼女はしっかりお嬢様の幸せルートを歩んでくれているようですよ。何よりだ。

「ケロ……あら？…そのあなた、受験生よね？ 受験票が落ちていたけれど、あなたのかしら？」

後ろを振り向くと、どんぐり眼の可愛らしい少女が立っていた。どことなく人間とは違う要素を感じるが、俺ほど悪魔側に容姿の影響を感じない。違和感は立ち方や仕草のせいだろうか？

「……すまない、俺の受験票だ。どうやらポケットから落ちていたようだ」

「いいのよ、気にしないで。同じ学校に入学するかもしれないんだから、仲良くしましょう？」

〈マガタマ〉に収納していた受験票を実体化する際、どうやら落としちゃったらしい。普段は空中に出現したものを手に取るため、ポケットの中に実体化する時に不手際をしていたらしい。実は〈マガタマ〉はある程度の質量の物体を収納できる、所謂アイテムボックス的機能も持っている。日常で違和感をもたれない範囲でそれとなく

使ってきたが、こんな失敗をするのは初めてだ。いや、手が震えてるのが直接的な原因なのは分かっているのだが。

「君も受験生か。助かった、感謝する。」

そして……そうだな、また会ったら仲良くして欲しい」

「ふふふ、任されたわ。じゃあ、またね、ケロ」

なんていい子なんだ。善意で俺に話しかけてきただけでなく、仲良くしようだなんて……八百万以来じゃないか？彼女が受かる事を祈るような事はしないが、うまく行って欲しいとは思う。本来、彼女のような精神の持ち主こそが「ヒーロー」の称号に相応しいのだから。

「……俺も行くか」

そろそろいい時間になったので、俺も試験会場へと進む事にした。この一歩が俺と世界の運命にとって決定的なものになるのは避けようが無いが、せめて小さな望みを託そう、その先に救いがあるようにと。

「……ここが……俺のヒーローアカデミアだ」



## 実戦と実践

実技試験の説明が行われる場所は大学の教室を思い起こさせた。受験生達がゾロゾロとそれぞれの受験番号が記された席へと捌けていく。自分の受験番号を確認したところ、結構後ろの席が記されていた。この場所は高い位置から周囲を見渡せる為、都合がいい。

片っ端からヘアナライズ<を行っていく。先程遭遇した少女も目に入るが、彼女の解析はすでに終わっている。受験生の弱点を把握したところでバトルロイヤルをさせられるとは思えないので、意味はないかもしれないが、情報はあって困ることはない……と思いたい。

このヘアナライズ<で得られる情報だが、相手の保有MAGを基に推定レベルを割り出し、属性耐性や弱点を看破し、<名>を暴く。ゲームではあまり意味の無かった最後の効果だが、個性と名前が密接なこの世界では大きなアドバンテージとなる。先ほどの少女の名前も<蛙吹梅雨>であると判明している。何と読むかは分からないが、蛙の文字から察するに彼女はカエルの妖怪か神の権能を<個性>として持っている」と推測できる。或いは雨や水に関する<個性>か。

まあ、<個性>そのものが判明する訳ではないので、得られる情報を過信できない訳だが、連携の助けくらいにはなってくれると信じている。俺が他人と連携が取れるかはこの際考慮しないものとする。

周囲の受験生達のヘアナライズ<情報を吟味していると、非常に煩いファンキーな見た目の男性が教室に入ってきた。周りの反応を見るに、どうやら彼はプロヒーローであり、この高校の教師のようだ。情報を提供してくれたオタクっぽい少年に感謝。件の少年の<魂の器>と彼の保有MAG量がチグハグなのが気になったが、試験の説明が始まってしまった為、そちらに集中する事にする。

このファンキー教師が「Yeahhh!」等と叫んでいたが、周りは冷え冷えの反応しか返していない。そして俺はそもそもこう言ったノリは付いていけないタイプだ。残念そうに「ノリが悪い」とか言われても、その何だ、困る。

肝心の実技試験の説明だが、内容は至ってシンプル。用意された市

外を模した会場に居る仮想ヴィランであるロボットを倒し、ポイントを競うそうだ。所謂、力なき正義は何とやらと言う事だろう。ヴィランに負けているようではヒーローなど勤まらないとも言おう。ここで実力を示せなかったヒーロー志望の人達は別の形で人を助ける道を見付けてくれる事を切に願う。まあ、俺は負けないがな、ふふふ。

ああ、分かりやすい暴力が課題で本当に良かった。しかも内容が個人の能力を測るものだ。俺のために拵えられたのかと疑ってしまう程だ。これが防衛や護衛、又は連携を中心とした内容の試験であった場合、苦戦は免れなかっただろう。人修羅の力は〈守る〉事に向いていない。当然だ。混沌王へと至る器である人修羅の力は周りを屈服させる為のものだ。暴力に限らず、圧倒的なカリスマ性、抗い辛い言葉の魔力、正に王の力だ。つまり、人修羅は守るのではなく、本来仲魔に守られる側の存在なのだ。

今の俺の実力はゲームで言う所の序盤が終わる頃相当であり、人修羅が自らの力に慣れ始めた辺りだと推測する。つまり、力任せの戦い方から抜け出そうとしている段階だ。この試験のように周りがライバルである場合、同じターゲットを狙えば、攻撃時に他の受験生を巻き込む可能性が高い。

手加減や精密攻撃を行うのならせめて単体攻撃の〈破魔の雷光〉……いや、自身の技量を大きく向上させる〈心眼〉や〈会心〉のスキルが欲しい所だ。しかし無いものを強請っても仕様が無い。自分が鍛えた技と人修羅の持つ身体能力を信じよう。何せ実力に自信はあるが、これは俺にとって初の実戦なのだから。

・  
・  
・

実際の試験会場に来てみると、俺含め全員その規模に驚愕していた。小さな街一つ再現しているのではないだろうか？何らかの個性を利用してはいるのだろうか、どれほどの予算が割かれたのか想像も付かない。雄英高校の本気度が窺い知れる。次の世代の育成に余念が無いと言う事か？心なしか何かを急いでいるような気がする、まっ

たぐの勘だが、俺を待つ碌でも無い運命を思えば、どんな厄ネタが潜んでいるのか分かったものではない。早急に次の世代を育成する必要が生じている可能性も……？

いや、今考えるべきことではない。試験の開始は目前だ。自己鍛錬と瞑想による戦闘のシミュレーションしか行つてこなかった俺が実際の所、どれほど戦えるのか確認するいい機会でもある。俺の妄想上での実力は果たして、実践された場合どこまで通用のか、自分に証明する時が来た。

周りは浮き足立っている。多くの受験生を出し抜き、早めに市街地の奥に配備されたロボットに辿り着ければ、乱戦の危険性はグツと減る。

人修羅の優れた五感で開始の合図を待っていると、唐突に「ハイッ、スタアアーツトツ！」とファンキーなDJヒーローの宣言が会場に響いた。何の前置きも無く行われた開始の合図に唾然とする他の受験生と尻目に路地裏へと飛び出す。大通りを爆走して目立つつもりは無い。下手に目を付けられても面倒にしかならないし、目的である単独行動に支障が出かねない。

俺にとつての〈敵〉に近付く程に、〈マガタマ〉の反応が強くなっていく。ゲームで言う所のエネミー・アピアランスインジケータが赤くなつていく状態だろうか。体感的に敵がどこに居るのか分かるのは非常に便利だ。更に成長した五感を意図的に鋭くし、敵の居るポイントを割り出していく。戦いの時が近い。ああ、とうとう俺は闘争の世界に片足を踏み込むのだ。

居た。数三。〈アナライズ〉……種族マシン。五レベル相当が二体、十レベル相当が一体。物理・氷結耐性、雷弱点。

気分が高揚する。思えば、産まれてこの方、自己鍛錬を除いて本気を出した記憶が無い。初めて自分の限界を試す事ができる。レベル的には格下であつても、あつさり死ぬのが女神転生だ。油断をするつもり等、微塵も無い。思考が戦闘用に切り替わって行くのを感じる。必要な情報のみが最適化され、思考を加速させる。

まだ敵の索敵能力の射程外。奇襲は可能。敵の大きさを考慮する

と、一回の行動で巻き込めるのは最大で二体。数を減らす事を最優先事項に設定する。敵の耐性から逆算、最善手は「ファイアブレス」による目眩ましを兼ねた先制攻撃か、錯乱を兼ねた「竜巻」による強襲。視覚・熱感知以外のセンサー類が装備されている場合目眩まし効果が期待できないため、後者で攻撃を決定。

口が大きく釣り上がるのを自覚する。ああ……闘争の始まりだ。

・

・

全身を支配していた熱は何時の間にか引いていた。自分を今支配している感情は失望。そう、失望だ。初めて全力が出せると喜び勇んで、全てを出し切るつもりでぶつかったが、蓋を開けてみれば最初の奇襲で二体が沈黙してしまい、続いてこちらを認識した十レベルが攻撃後の隙を付いて反撃を行って来ると思いきや、「ターゲット発見」と暢気な反応を返してくる始末。

怒りに支配されそうな感情を抑え、油断無く確実に相手の破壊を遂行する。「突撃」で敵の背後に回り込み、「スクンダ」を二回発動。敵マシンの反応が目に見えて鈍くなるのを確認し、反撃を許さぬ立ち回りで「ファイアブレス」を放った。「火炎高揚」によって強化され、物理的圧力を伴った業火の吐息を防ぐ手段がある筈も無く、仮想ウィランは融解しながら崩れ去った。

何だコレは。いや、理屈では分かる。そう、受験生は皆先ほどまで中学生だった者達だ。子供相手に大人気ない相手をぶつけても試験に等なりはしない。それでも感情は納得してくれない。

初めてだったんだ。産まれて、ずっと未来に怯えて。ただ、ただ己を苛め抜くように鍛えて。生き残れるように、自分と言う人格を、心を失わないように頑張つて。そしてやっと自分の努力の成果が見られると思ったのだ。どこまで出来るようになったのか測れるかと思っただのだ。ああ、見当違いの考えだった。

俺は「人修羅」なのだ。木っ端悪魔の権能を持つ他の受験生向けに作られた試験内容で何を計ろうと言うのか。言いようの無い虚しさ

が心に去来する。嫌なへ特別だ。他の皆が必死に戦っている中、俺は全力を出さず、悠々と試験を受けるのだらう。そこに達成感などある筈も無い。

ゲームでは、人修羅はシステム的な理由で所持できるスキルに限りがあった。故に不要なスキルと残すスキルの取捨選択が必要だった。だが、俺は違う。このへマガタマはMAGに依じて俺に悪魔の力を与えてくれる。新たな力を得るために嘗て得た力を失う必要性は何処にも無い。俺は覚えられる全てのスキルを所持し続ける人修羅なのだ。

そして二十レベル。たったの二十レベルだ。人修羅が本来持つ潜在能力の、ほんの片鱗程度だ。

その一欠片でコレ。俺が想定していた以上の力。暴力。鉄の塊が吹き飛び、融解するなど、誰が想像出来ようか。来るべき運命に備えて俺は何処まで強くなればいい？強くなったとして、生き残れたとして、そこには人間としての俺の居場所はあるのだろうか？

・  
・  
・

当初のモチベーションはもう何処にも無い。他の生徒の邪魔にならないよう、必要最低限のロボットを索敵しては適当に屠っている。油断しようにも、実力差に開きがありすぎる。行動させない、攻撃させない、自分が有利になるように立ち回る。当たり前前の行動、普段心がけている事をするだけで敵が崩れる。

態と攻撃を受ける、苦戦を演出する、等と言うのは他の受験生にも、そしてこの試験そのものへの侮辱行為だ。そんな行いは俺自身の矜持に反する。

余裕ではある。しかし手を抜くつもりも無い。しかし虚しさは募るばかりだ。

周囲に感覚を伸ばす。試験開始から結構時間が過ぎている筈だ。

試験も佳境に入る。ならば何らかの追加演出が入ってもおかしくは無い。そう思った瞬間、大きな揺れを感じた。地震の振動ではない。ならば他の受験生の個性か、学園側の仕業。そして先程俺の見た限り、〈地震〉に関連のありそうな名前の受験者は居なかつたはずだ。となる……

「うわああああああ!?」

「で、でかすぎる!逃げろ!!」

優れた聴力が他の受験生達の悲鳴を捉える。結構離れた位置で何かが出現したようだ。ああ、そう言えばあのファンキー・イー・ヒーローが言っていたか。ポイントにならないお邪魔虫なロボットが出現すると。仮想ヴィランとしては正しいな。雄英側は絶対に倒せない敵が現れた時、受験生がどのような立ち回りをするのかモニターするのだろうか。常に敵が自分より弱い等、現実ではありえないからな。

……どうするか。悲鳴を聞く限り、逃げ遅れた者や怪我をした者も居そうだ。今人と関わる気になれないのが正直な感想だ。

そもそも俺が集めたポイントは合格ラインに届いているかは微妙なところだ。実は以前居た場所からは大分離れた位置に居る。他の受験生がポイントの独占を行う為には街の奥が狙い目だと気付いたらしく、そのうちの一人が爆音と共に近づいて来た。接触を避ける事に気を割いてると、ロボット達からどんどん遠ざかってしまったのだ。

本来なら騒ぎを無視して次の敵を探すのだろうか……こんなセッションで試験を続けるのが辛くなってきた。無理矢理にでも気分を変えなくては、俺の査定に悪影響を出しかねない(在るのなら、だが)。

そうだ。俺は〈ディア〉を覚えた時から密かに憧れていた行いを実行できるチャンスに気付いた。

そう、それはM M O R P G黎明期で生まれた善意の行いでありなが

ら、無遠慮で無配慮な行為。現実ではそうそう行えない類のもの。その名も「辻ヒール」。辻斬りの如く、見知らぬ赤の他人に勝手にヒールを行い、傷を癒しながら何も言わずに立ち去るクールでアホな行いだ。

受験生同士で助け合っつてはいけないと言うルールは無いわけだし、怪我人をそのままにするのも気が引ける。人とあまり話せていない俺でも出来そうな救助活動だし、やってみるか。いや、やろう。ああ、自分を騙せてる気がしない。でもやる。

低下していたモチベーションが少し回復するのを自覚しつつ、俺は騒ぎの中心地へと向かい始めた。

## 閑話 傲慢と矛盾

薄暗い空間。時間が意味を成さないここは何処でもない舞台裏。赤い幕は未だ開けられる気配を見せず、観客は入場すらしていない。

そんな奇妙な場で、子供と老婆が何も無い空間を見つめていた。

「坊ちやま、何故〈彼〉を選ばれたのですか？」

「不思議かい？器じゃないと、そう言いたそうだね。」

金髪の少年は分かっていると云わんばかりに老婆に言葉を返した。

「アレは矛盾の塊だ。しかも、あれ程傲慢で不遜な魂はそうそう見掛けはしない。当初は行き詰っていた混沌王への道が開くのなら、ああ言った変り種が良いかと選んだのだが……今ではその選択は正しかったと思っている。」

「傲慢？彼がですか？」

少年の言葉に老婆は共感を示せない。今話題に上がっている人物、〈彼〉は人修羅である自らの実力に関しても、結構謙虚な姿勢を取っていると彼女は記憶していた。

「謙虚？彼がかい？冗談じゃない。」

君も知っているだろう。僕はこれでもアマラ宇宙の無数の可能性を見てきた。幾多の人修羅達の運命と結末を見守ってきた。介入する時があれば、傍観者に徹する時もあった。しかし、しかしだ。ただの一度も混沌王に至る者は現れなかった。」

「はい、存じております」

そう、そもそもの話、今回は戯れに近い試みであった筈だ。混沌王誕生の前提条件である〈東京受胎〉が起きていない世界に居る〈人修羅〉に何の価値があると言うのか。

「彼は常にこう思っているんだ。「絶対混沌王に成らない」とね。ねえ、それって言い換えればさ。〈自分は混沌王に成りうる器だ〉と確信しているって事じゃないのかな？」

「そ、それは……」

老婆は言葉に言い淀む。老婆も数多の人修羅の終わり、死を見てき



た。その無数の死の運命の先に混沌王が存在すると言うのなら、可能性がゼロではないだけで、それは実質到達し得ない存在だ。そう思える程度には、あまりにも過酷な道だった。

それを、東京受胎すら起こっていない世界で、悪魔との交戦経験すらなく、自己鍛錬しかした事のない木つ端存在が「自分は王の器だ」等と嘯くのなら。

「高慢で不遜……その通りでございますね。」

「そう、無自覚かもしれないけど、彼は条件さえ揃えば自分が混沌王へと至ると確信している。ピアノの上に猫を乗せると、踏まれた鍵盤が偶然モーツアルトの曲に〈現実〉になると言っている様なものだ。条件を揃えれば至ってくれるのなら、僕は苦労等しない」

少年はその整った顔立ちを僅かに歪め、どこか疲れた表情を見せる。

「しかし、ああ。だからこそ面白い。彼は非常に人間らしい。人間らしく傲慢であり、矛盾している。思考と行動がこんなにもチグハグなものも珍しい。」

その表情は愛おしい何かを見詰める様で、しかし獲物をいたぶって楽しんでる様にも見える。

「友人が欲しいと言うくせに、クラスメートに話しかけない。無口だから？まさか。心の底では分かっているからだ。人修羅の言葉にはMAGが宿る。本来悪魔を勧誘できるんだ。人間相手ならば誑し込むなど造作もない。」

少年は嬉しそうに、目を輝かせながら語る。その語調に少しずつ熱が入り始める。

「相棒が欲しいと言うくせに、唯一の友人は遠ざけようとする。いや、それ所か、心中では今後起こるであろう全ての運命に一人で立ち向かう心算だ。ああ、何と言う傲慢の極みだろう！」

それでこそ人間だとも言わんばかりだ。

「彼は本質的に他者を必要としない。していない。だから目標を完遂する上で、〈贅肉〉になりそうなものは削ぎ落としている。巻き込まない為に。関わらせない為に。」

その言葉はまたしても老婆に衝撃を与えた。

「彼と家族の仲は良好だったと記憶しておりますが……もちろん唯一の友人の少女とも。」

他者を必要としない程情の無い人物には見えなかったが、あれは表面上のものなのだろうか。

「ああ、勘違いしているようだね。必要である事と他者に情を持つ事はイコールではない。」

人はへ必要だから人生のパートナーを作るのか？友人は？必要だから世話を焼くのか？

そうではない筈だ。必要性と愛情はキツチリと分かれた概念だ。」

少年の言葉に僅かに沈黙し、思考する。そう、その通りだ。必要とは不可欠を意味する。もちろん友人や恋人をへ必要だと言う人は多く居るだろうが、重要なのはそこではない。

「そう、世の中には居るんだ。情が無いわけでないけれど、一人で完結している人間が。前世では社会と言う枷に縛られて広い人間関係を築いていたみたいだけど、幸か不幸か、ここでの彼はへ人修羅だ。」

「……生きる為に社会に守られる必要が無い。」

邪悪な笑みが少年から零れる。

「無自覚、全ては無自覚故だ。彼は人間関係を希薄にするのが自分の目的に沿っていると思っっている。ふ、ふふふ。」

今までの人修羅達は全て何らかの形で他者を頼っていた。仲魔、恩師、嘗ての友人達。僕も彼と同じように確信している。新しい可能性が生まれようとしている。より傲慢な、人間らしい魂の答え……

彼は確実にこちらに向かって来ている。一步、また一步とね」

幕は未だ上がらず、しかし役者達は傲慢な観客を待つ。至る筈の無い者が新しい可能性を示す事を期待して。

## 矜持と誇り

いいかい、修羅坊。お前さんは強い。他の子と競争でもしようものなら、ウサギと亀より酷い実力差が出ちゃうだろうさ。で、お前さんは頭が良くて良い子だから、何も言われなくても運動会で見学に回ったり、手加減して走ったりしてる。

ああ、そうだな。異形型だから全力が出せないのは「仕方ない」のかもな。でもさ、修羅坊。出てもいい競技でまで手加減するのは違うぜ？相手が可哀想なのは侮辱もいいところだ。

競争相手を見下すな。例えお前より弱くても、格下でも、相手は誇りをかけてお前さんに勝負を挑んでいるんだ。

修羅坊。人の誇りを侮辱しちゃいけない。忘れるなよ。お前さんは良い子だけど、人に気を使いすぎるからな。優しくするだけが氣遣いじゃないんだ。

・  
・  
・

遠方で大きな振動が響く。超人的な聴力が四方からの悲鳴を捉える。

しまった。お邪魔ロボットが一体などとは言われていなかったか。四方に展開しているらしく、距離的に試験終了までに全てを回ることは不可能だろう。他の場所の怪我人は……流石に学園の人間が救助するか。いや、そうでなければ不祥事として社会からバッシングの嵐だろう。

素直に当初目的としていたポイントへ向かう。悲鳴だけではなく、無念の声も聞こえる。

「畜生、ちくしよおお……ここまで頑張ったのに、三年間この日の為に費やしたのに……」

「俺が馬鹿だった。何でアレに立ち向かおうとしたんだ……いてえよ、いてえ……」

……何が辻ヒールだ、クソ。少しだけ回復していたテンションが目に見えて下がっていく。彼らは遊びでやっているんじゃない。今人に関わりたくないから、適当に助ける？随分な物言いだ。ゲームならそれも良かったのかもしれない。あの声が聞こえたか？そうだ、皆誇りを賭けてこの試験に挑んでいる。俺はまた侮辱しようとしていた。また、同じ事を繰り返そうとしていたのだ。

ダメだ、切り替える。こんなメンタルで現場に到着して何が出来る。悩むのは、後悔するのは終わった後でいい。

アレか。結構な距離がある筈なのに、すでにその姿が見えている。巨大だ。ビルより大きいとは何事だ。〈アナライズ〉……種族マシン。推定二十四レベル。物理・氷結耐性、雷弱点。え、いや、二十四レベル!?

敵のレベル、まさかの自分越え。三ポイントのロボットが十三レベルだったのに対して、零ポイントロボットが強すぎる。この強さならば、本当に倒される事を想定していないのだろうか。

強化された視力がロボットの足元の瓦礫に巻き込まれている受験生を数人捉える。接敵まで数秒。優先順位は救助か、危険地帯から脅威の排除か。救助活動を行っている他受験生多数確認……危険地帯から脅威の排除を最優先事項に設定。勝利条件、人が居ないポイントへの誘導。撃破の必要性は無し。

意識が、思考回路が鋭敏化していく。他の事に回していたリソースを全てこの場の判断と戦闘に集中させる。

体が熱を帯びる。安全に立ち回る事など考えない。あの巨体を動かすならば、多少のリスクは犯さなければならぬだろう。これまでと違って、事前準備に時間をあまりかけられない。〈挑発〉による防御力弱体化と突進力に優れた〈突撃〉が最適解か。だが足元を先に攻撃してバランスを崩さなければ、あの質量をまともに動かせないだろう。

あの大きさに通じる崩し技は現在へヒートウェイブしかなかったが、威力が心許無い。先に〈挑発〉を使わなければ効果は薄いだろう。そうになると、先にこちらの存在を明かす事になるため、先制攻撃を確実に行えない。敵の攻撃力は〈挑発〉の影響で倍増し、反撃のリスクも相応に上がる。自分よりレベルが高い敵を単独で倒せると考えない方がいい。そこまで自惚れていない。時間稼ぎに徹するのが望ましいが、正直に言うへと人修羅の持つ序盤のスキル群は遅延行動に向かない。自分より強い敵に勝つ構成でもない。優秀だが、突出したものが無いのだ。

「他に手は無い……」

受験生が危なくなったら、もしかしたら学校関係者が止めてくれるかもしれない。救助に来てくれるかもしれない。でも、そうならないかもしれない。

受験生が可哀想だから介入するのか。それが正しいから介入するのか。見捨てられないから介入するのか。何故助ける？同情か？正義故か？博愛か？

否。

父さん。俺はまた人の誇りを侮辱しそうになった。でも、ギリギリで踏み止めた。

そうだ、真剣に勝負を挑む者には敬意を示さなければならぬ。相手が例え敗北者であろうと、それは変わらない。俺は自分の矜持を見失っていた。

アレを止めるのは他の受験生のためじゃない。俺の矜持を守るためだ。一人で落ち込んで、父から学んだ事を忘れるような失態は拭わなければならない。正面から向き合って。

目立つように叫びながら走り出す。確実に注目をされる為、派手に周囲をへ暴れまくりで破壊しながら移動する。巨大エネミーは程なくしてこちらに気付き、脅威だと認識したのか、向きを変えてくれた。好機。

接近し、叫ぶ。〈挑発〉は意味のある言葉でなくとも効果が発揮され

る。言葉の内容ではなく、声と共に相手に叩きつけられるMAGが逆上を誘い、防御を薄くするのだ。

完全にターゲットにされたのを自覚する。相手は既に攻撃の予備動作を開始している。猶予は無い。すかさず右手にMAGで生成した光剣を实体化。そのまま相手の足元のキヤタピラに熱風を伴う衝撃波、へヒートウェイブを放つ……ほぼ不動。効果は想像以上に薄いか!?!くそつ、物理耐性の上からだどへ挑発へ込みでも威力が足りなかったか!

だが俺にバランスを崩す範囲攻撃は他にない。へ竜巻へではいくら威力があっても、範囲が小さすぎて話に成らない。へ暴れまくりへは乱打技だ。一撃が弱い連続攻撃では尚更効果が期待できない。

既に自家用車より大きな拳が迫っている。こちらは技を発動した反動による硬直がまだ解けていない。無理やりへマガタマへの特性をいつものへマロガレへからへカムドへへと変更すると、その直後に全身が圧倒的な衝撃に見舞われる。正直痛みを感じる暇も無かった。吹き飛ばされたと気付いたのは、ビルにめり込んだ自分の身体を自覚した時だ。

痛みは後からやってきた。痛くない箇所が無い。当然だ、へ挑発へで二段階強化された、レベルが上の敵からの攻撃。しかも見た所、アレは物理特化型だ。生きているのが不思議なくらいだ。

ギリギリだったか、へマガタマへの特性を換えられて良かった。実戦では初めて使ったが、これの問題は再度特性を変えるまで数分待たなければならぬ所だ。普段使っているへマロガレへは特に弱点も耐性も持たない汎用的なものだ。それに対して、今回変更したへカムドへの特性はへ物理耐性へを得る代わりにへ状態異常へにかかりやすくなるというもの。

女神転生視点で致命的な弱点なので使いたくは無かったが、今回は止むを得なかった。全身ボロボロだが、へティアへで動けない事も無い。相手はすでにこちらを脅威と見做してない。狙うなら移動の間だ。キヤタピラであっても、周りには大量の瓦礫がある。重心が確実に崩れやすくなる。

痛い。〈ディア〉。痛い。〈ディア〉〈ディア〉〈ディア〉。痛い。だが、身体は動く。スキルを使うリソースが尽きかけている。傷は多少癒えたが、体力も、魔力も一回分捻り出せるかと言った所だ。他の受験生を回復する所の話ではなくなったな。

だが、まだだ。あの巨体を止めて、初めて俺は胸を張って他の受験生と顔を合わせられる。

重心が傾いたな。こつちを向け、デカブツ……〈挑発〉。

「!!ターゲット確認」

これで相手は攻撃力が最大まで強化された。もう逃げ場は無い。敵は不安定な足場からでも攻撃を繰り返そうとしている。ここしかない。嘗て、〈反撃〉のスキルを習得した時、どのようなものなのか今一分からなかった。ただ殴り返すだけのものとは思えなかったのだ。だが今なら理解できる。このスキルは相手の攻撃のタイミングを見切る補助をしてくれる。カウンターを狙えるように。

今。相手の拳が頬の肉を裂いて行く。構わず残った最後の体力で〈突撃〉を発動する。巨体の重心の中心は下部。言い換えれば、最も崩しに適している攻撃箇所はそこからもっとも離れた位置……つまり上半身と繋がっている伸びきった腕だ。

弾くでもなく、押し返すでもなく、俺がやったのは。伸びきったヤツの腕を更に勢いをつけて引っ張る事だ。つまり、先ほど掠っていった拳の指に、威力を逃さないよう〈突撃〉で全力で後ろに体当たりした。

人間の様な関節のある腕を作った技術力はすごいが、裏返せば人体と同じ弱点が発生する言う事だ。伸びきった関節ほど壊しやすいものは無い。限界まで防御が弱体化しているなら尚の事だ。

御邪魔虫ロボットは伸びきった腕に引っ張られ、倒れ込む。その衝撃で巨腕が関節毎破壊されるが、同時に俺も地面に叩きつけられる。いくら掠っただけとは言え、あの攻撃力だ。こちらもう動けないほど身体が傷ついている。

最後の〈ディア〉を使う。焼け石に水感がすごいが、意識を保てる

だけ御の字だ。つんのめって倒れているが、問題はアレがまだ活動するかだ。しかしヘアナライズを見る限り、一時的に擬似的な麻痺に陥っているようだ。システム復旧までの猶予と言った所か。

力を振り絞り、声を上げる。

「ガツ、カハツ……ゴ、コイツはまだ完全に沈黙してない！出来るだけ遠くに逃げておけ！」

変な声が出てしまった。喉に血が溜まっていたらしい。恥ずかしい。

いや、切り替えていこう。これからどうする？復旧までに俺が動けるようになるかは怪しい所だ。体力も魔力も底を尽きたし、傷も酷い事になっている。〈ディア〉で瞬時に癒えない所を見るに、内臓がやられている。骨折程度なら数回の〈ディア〉で完治するのだが、今回はビルに叩きつけられた時に無視できない傷を負ってしまった。

確實合格とか余裕ぶっていた自分が滑稽で笑えてくる。だが、それ以上にいい気分だ。恐らく、特に制限無く一対一で戦ったのなら、多少の傷を負いはしても俺が確実にあのロボットに勝っていただろう。だが、今回の勝利は意味合いが違う。俺は〈守る戦い〉をしたんだ。人修羅の身で、それを成し遂げたのだ！

「……ヒーロー、ゲフツ、クククク」

混沌王に成らない為とは言え、俺はヒーローを目指しているんだ。今日、俺はそれが実現可能だと自分に証明出来た。一度は人の努力や決意を侮辱しかけたが、俺は自分の心に決着を付ける事が出来た。

そんな清しい気持ちに浸っていると、自分に近づく気配が一人。

「き、君、大丈夫かい？うわ、怪我だらけじゃないか！ど、どうしよう。僕も個性を使いすぎてお腹が危険なのに……」

何やらキラキラした顔の、ヒラヒラ服の少年だ。お腹を押さえながら青い顔でこちらを気にしている。いや、君の方こそ大丈夫そうではないぞ。



「結構体格いいから重そうだなあ……引きずる為に力を入れたら絶対に良くない事が起きてしまうね！」

内股気味にウインクを飛ばしてきた。どうすればいいんだ、これ。

「あ、他に救助していた人達の手が空いたみたい！おーい、こっちにも人が倒れているよー」

あのヒラヒラがやたら目に付くせいで目立つな。お、気付いてくれたみたいだ。しかし、救助に向かった筈なのに、要救助者になるとは……皮肉が利いてるな。

……ああ、早く帰って父さんの手料理が食べたいな。

## 権能の範囲

巨大なモニターを真剣に見つめる複数の瞳。名門雄英高校の教師陣は本日用われた入試試験の様子を見て、意見を交わしていた。

「しかし、まさかゼロポイントヴィランが破壊されるとはな。数年ぶりか？」

「そんなに経つのか……あれ？今年は二体破壊されたって聞いたけど、違った？」

「ああ、もう一体は一時的に行動不能になっただけのようだ。入学前の学生が成したにしては十分な戦果だな。」

今話題に上がっていたのは緑谷出久と言う受験生が成した偉業だ。敵の撃破によって得られるヴィランポイントは零点にも関わらず、試験最後に他の受験生を助けるために巨大ロボットを撃破すると言う勇氣ある行動によって、隠れ評価ポイントである〈救助活動ポイント〉を大幅に獲得し、彼は見事合格を勝ち取った。

「忘れないうちに伝えておくけど。そのロボットを停止させた受験生、ポイント評価で意見が分かれたから、ここで再度話し合えて通達来てたぞ。」

「オツケーイ、で誰だっけ？ゼロポイントに攻撃した生徒自体は複数人居たYO。」

全ての受験生を記憶出来る筈も無く、教師の一人が詳しい説明を求め。

「えーっと、資料、資料っと。名前は阿久間人修羅。〈個性〉は悪魔。悪魔っぽい事ができる……具体的には火を吹いたり、呪いをかけたり出来る、とあるな。」

「あら、悪魔と言ったら言葉巧みに契約を迫って魂を頂くものだ」と

思っていたわ。それ、どちらかと言うと妖怪の方が近くない？」  
「話の腰を折るな、それは最初に彼を診断した医者に言っただけで、彼はヴィランポイントだけじゃ合格点に届いていなくて、最後のゼロポイントの停止が救助目的だったのだったのが議題に挙がっている。」

情報を掲示すると、正面の巨大液晶に件の少年の映像が映し出される。

「最初の距離的に他の受験生を認識できるとは思えない訳だが、どうにも攻撃方法が怪我人を庇ってるようにしか見えなくてな。」

「攻撃前に他の受験生達のピンチに気付いたとか？」

「いや、ここを見てくれ一切行動に躊躇が無い。予想外な現場に出くわして路線を変更した風じゃない。」

「じゃあ、事前に察知したんじゃないか？」

「この〈個性〉でか？じゃあ、ここに書かれていない特性があると言う事だ。」

流石にヒーロー育成の名門高校に〈個性〉の申請漏れは洒落にならない。教師が生徒の〈個性〉を把握していない場合、本人だけでなく、他の生徒も危険に晒される事になる。

「あ、待って。注釈でこの子の〈個性〉、発展途上の可能性ありって書かれてるわ。」

「なんだそりゃ。この年齢でか？珍しいな。」

基本的に〈個性〉は発現してから数年である程度安定する。それ以降の成長は応用や威力の強化が中心となり、新たな特性が生まれるのは非常に稀だ。

「この叫びの後に光りの剣？みたいなのを作っているし、衝撃波も出しているし、特性の応用にしては多彩すぎるわ。」

「つまり、〈個性〉の初期診断結果の間違いだど？稀にあるとは聞くが……」

「少し待ってくれ。この〈個性〉、思ったより難儀かもしれないぞ。」

後方で議論を見守っていた教師が意見を出す。

「俺の〈個性〉の関係上、若い頃は悪魔とかそう言った伝承とかを調べていた時期がある。そこ、茶化すな、話が進まない。

で、だ。悪魔と一言に言っても、言い伝えの内容は様々だ。火を吹く者も居れば、空を飛ぶ者も、世界を滅ぼすようなやつだっている。どの悪魔を指しているのか分からないと、特性なんて把握できない。悪魔っぽい事と今回試験で好成绩を残した〈個性〉蛙の少女の蛙っぽい事では訳が違うぞ。」

皆この意見に納得したのか、彼の〈個性〉に関する資料に引つ張られずにその行動を見直す事に賛成する。

「受験生一人にあまり時間をあまりかけ過ぎたくないな。さつきと検証を進めよう。最初から彼の行動を地図と連動させて進めてみよう。何か分かるか？」

「開始直後から真っ直ぐに仮想ヴィランの所に行ったね。これは、何らかの探知系の特性を持っていると見ていいと思う。」

「で、初期の敵を撃破後、次のポイントに向かうかと思いきや、ウロウロしているな。」

「他のカメラと連動すると分かりやすい。周囲の受験生から離れようとしているんですよ。だから最終的にポイントが足りなくなりました。」

「そりゃコイツの落ち度だ。がむしゃらに本気じゃないヤツは落としても問題ないんじゃないか？」

教師の中の一人が、やろうと思えば自力で敵ポイントを合格ラインまで稼げた可能性が高いと知り、憤慨する。他の生徒は皆真剣に挑んでいるのだから、その怒りは正当だ。

「まあ分からなくはないけど、議論点はそこじゃないから抑えて。もしかすると他の生徒と会う事が大きなデメリットに成る特性を持っているかも知れない訳だし。」

「……戦闘が雑だな。自身の放っている技の制御に精一杯と言った印象を受ける。他の生徒が居ると戦い辛かったとかか？」

隈が目立つ教師が戦闘場面を注意深く観察して発言する。確かに、少年から放たれる技は範囲を絞らず、ある程度ランダムな破壊を周囲に及ぼしている。

「うーん、きつきの緑谷君もそうだけど、この年で〈個性〉の制御が完全じゃないって珍しいわね。あつちは制御どころか暴走に近いかもだけど。」

「また話を飛ばすんじゃない。結論出さず。こいつは何らかの方法で他受験生の危機を事前に察知。救助のためゼロポイントヴィランへ呐喊し、彼らの脱出の時間を稼いだ。救助活動ポイントの対象だ。反対意見は？」

「ない。」

「ありません。」

「ないな。」

「そうなると順位は……」

「あ、その話、ちよつと待ってくれるかな。」

まとめに入ろうとすると、待ったが入る。発言元はぬいぐるみと見紛う人型をしたネズミのような人物。彼こそ、この雄英高校の校長その人だ。

「恐らく病院か役所での更新のし忘れだと思うけど、〈個性〉の特性をしっかりと記入できていないのは試験内容とは別にマイナス査定が入るから、順位は合格者としては最下位かな。」

「……分かりました。しかし、どうします。さっきまでA組、B組の枠共に全部埋まっていたけど、阿久間が合格するとなると、どちらかの組の最下位だった人物を不合格にする事になりますか。」

ランキングの変動より合格枠の変更の方が処理的には面倒くさい。今日中に終わらせるなら、このあたりはハッキリとさせたい。

「いや、それには及ばないよ。何、普通科からヒーロー科に転入もあれば、去年のようなイレギュラーで一クラス無くなることだってある。彼はA組に特別枠として組み込んでおいて。」

常の校長らしくない言動。政治的能力が高い彼だが、それ故敵も多い。受験生一人を優遇するような措置は大きな隙となりえる。驚く教師陣に校長は静かに告げる。

「無自覚なら兎も角、普通なら自覚のある〈個性〉の新しい特性を記入漏れしている生徒なんて受け入れないよ。彼を合格にするのは、ある意味僕の我侷。だからそれで繰り下げの不合格者を出すのはフェアじゃない。」

流石に皆顔を見合わせる。そもそも合格者の自覚のある〈個性〉関連の記入漏れなんて今回が初めてのケースなため、困惑も激しい。

「彼は危うい。ヒーローとしての素質も勿論感じるけど、同時にこちらから関わらなかつたら、とんでもない事をしてしまいそうな危うさを感じる。僕が言うのもなんだけど、理屈抜きで彼を手放してはならない気がするのさ。頭痛を覚えるレベルでね。」

「校長の頭脳がそう訴えているのなら、否やはありません。あの制御で精一杯だった炎や衝撃波を見るに、私のクラスが適切と考えても？」

「うん、そうなるね。個性の制御に失敗した時に一手遅れるだけで惨事に繋がりがかねない。君の個性が頼りさ。」

話題は出尽くし最終的な結論も出たため、全員が退出の準備を始めると、教師の一人がふと疑問を口にした。

「あら？ そうなるとA組は二十一人で奇数にならない？ ペアが条件の授業、結構あったような……」

「ああ、それは大丈夫。僕ら教師にはそんな時に対応できる素晴らしい言葉があるから。」

校長先生が自信満々に発言するが、一部教師は嫌な予感を覚える。そしてその実際、その予感は正しかったと証明される。

「ペアを作れなかった人は先生と組めばいいのさ。」

・  
・  
・

ああ、お腹も膨れて大満足だ。何と今晚は珍しく母さんも料理を作ってくれたのだ。母さんは気が向いた時に驚くほど凝った料理を作る。でも普段は絶対に作らない。そう言えば、作りたい物以外作りたくないって以前話していたな。

もちろん、父さんの料理もいつもより豪勢だった。まるで入学祝のようだった。落ちてたら恥ずかしいけど、まあ、流石に吹っ切れた。ヒーローへの道は雄英だけじゃないし、結果はどうあれ、自分でもヒーローに成れると自信が付いたんだから、この試験は無駄にはならない。

そして元気に夕飯を食べている事から想像できる様に、実技試験の怪我は完治している。雄英の保険医、リカバリーガールと言うおばあちゃんに治療してもらったのだ。まあ、回復に特化した〈個性〉なら

軽く〈ヘディア〉の回復量くらい超えてくれないと困る。最初に運ばれた際、体力が無いと回復はできないと言われた為、数時間睡眠した後で治療をしてもらった。寝る事で傷は治らなくても、MAGが満ちてるこの世界なら体力も魔力も十分に回復する。自力で治療するため、強力な回復スキルである〈ヘディアラマ〉が欲しい所だが、三十七レベルでの習得と来れば、それを求めるのは現実的ではない。

この数年、訓練だけでは中々レベルが上がらなくなってきた。当分二十レベルで頭打ちだと思っていたが、先日の死闘が大きな経験になったのか、俺の魂の器は成長し、俺のレベルも二十一となった。これは俺にとつて非常に大きな意味を持つ。何故なら重大スキル〈フオッグブレス〉を習得したからだ。これは周囲に煙幕のような息を吐き付けるものだが、重要なのはその破格な効果だ。

なんと、煙幕の範囲内の敵全ての命中と回避を大きく下げてくれるのだ。煙に含まれたMAGが相手の認識そのものを阻害するらしく、今後の生存率を大きく高めてくれる事は疑いようの無いスキルだ。あの巨大ロボット相手にこそ使いたかった技だが、すでに過ぎてしまった事を嘆いても仕様が無い。

そう、今は暗い気持ちなんかに構っていられない。あの試験で精神的に成長できた気がするし、今日はご馳走で家族と楽しく過ごせたい。これは俺に流れが来ているのでは？

ああ、クソみたいな経緯でこの世界に生れ落ちたけど、存外幸福になる方法はあるのかもしれない。〈マガタマ〉の力や〈混沌王〉の存在に気を取られすぎていたか？なんてな、ははは。

ふふ、今日はいい夢が見れそうだ。

おやすみなさい。

・  
・  
・

夢と現実の狭間。



人に在らざる者よ。

悪魔に在らざる者よ。

今こそ、本当の目覚めの時が訪れた。

うるさいな、どこの誰の声だ？寝たばかりなのに無茶を言う。

周囲を見渡すと生物的な、臓器や生肉を思わせる壁に挟まれている。或いはこれは血管の中なのだろうか。後ろにも肉色の壁が立ちふさがる。正面には通路。基本的に壁は生物的で、常に脈打っている。壁のそこ彼処に幾何学模様が散りばめられており、赤い毛細血管のようなものが周囲に無数広がっている。あまりいい気分にはなれそうにない。

嫌な夢だ。いや、最悪な夢だ……夢であってくれ。

身体が勝手に通路を進む。暫く進むと、昔テレビで見たシロアリの蟻塚を思い出させる木の幹のようなオブジェが正面に鎮座している。近付くと、覗き穴のようなものを確認できる。奥から不思議な気配を感じる……

やめろ。覗くな。それだけは、やめてくれ。

思いとは裏腹に、身体は覗き穴に接近し、意識はまるでその中に吸い込まれるように暗転した。

気付くと幕が垂れた舞台の正面に居た。観客は俺一人だ。身体は相変わらず自由に動かせない。

真つ赤な垂れ幕がいきいきと音を立てて、上り始める。

舞台の上には車椅子の老紳士とそれを後ろで支える喪服の淑女。

「……いらつしやいましたか。宿命があなたをここへ誘ってくれと承知しておりました。」

## 老紳士と喪服の淑女

俺には幸せを微かにでも願うことも許されないのか。久しぶりにいい気分で寝た日に限って最悪な事が起こる。

これがただの悪夢ならどんなに良かった事か。だがこの邪悪な気配が、圧倒的なオーラが、あの魂の奥まで見通しているような鋭い眼光がそんな儂い希望を持つ事を許しはしない。あの白いスーツに身を包んだ車椅子の老紳士は俺が空想で生み出せるような存在ではない。もっと悍ましい、超常のナニカだ。

「悪魔の力を宿せし少年、人修羅。ここは魔界、アマラの果て。」

ああ、こちらの都合も困惑も絶望も無視し、あちらの都合だけを押し付けてくる。そうだ、彼女等はそう言うモノだ。この喪服の淑女も見た目のままの存在ではないだろうし、こちらが話の内容を理解しているかなど気にもしていないのだろう。

「あなたは今はまだ弱く、アマラのマガツヒにもただ流されるだけ……」

ここに来たのは、迷い込んだも同然に思えるでしょうが……案ずる事はございません。」

俺が案じているのはここに迷い込んだ事じゃない、お前たちに出会ってしまった事実そのものを案じているんだ。

「今のあなたが、この地ですべき事は何もありません。そう、今の力弱きあなたには……」

お、今回は何事も無く帰れるのか……何だ、この違和感は。俺は何かを忘れている。致命的な何かを忘れてるぞ。

これは混沌王ルートと同じく無印の真・女神転生IIIではなく、

後に販売されたNOCTURNEマニアクスのイベントだった筈だ。初めて人修羅がアマラ深界に迷い込んだ時、何か良くない事があったような……?」

「……ですけれど、これは渡しておきましょう。その燭台……ロウソク立てはメノラーと言います。この世界で力を得たければ、そのメノラーが道を与えてくれるでしょう。」

あ、え?嘘だろ?ああ、クソツ!何で忘れていた!何で俺はこんな重要な事を忘れていた!!

俺は人修羅なんだ……魔人とは切っても切れない縁がある事を失念していたなんて!

「これで、この〈王国のメノラー〉はあなたの物です。〈マガタマ〉から取り出せば、周囲の人も共に運命の場に引き込まれるでしょう。」

では……またの機会まで。宿命が望むのであればまた会うこともありましょう……」

キイキイと幕が下りていく。やけに耳に残る音、不快な音だ。意識がこの場から離れていく。気分が悪い。

・  
・  
・

……最悪の目覚めだ。ただの悪夢だと思ひ込みたいが、〈マガタマ〉の中に確かに〈メノラー〉の存在を感じ取れる。車椅子の老人、或いは金髪の少年……ルシファーにとって見た目など己を着飾るための戯れでしかないのだろう。あの闇の勢力のトップは俺が力を持つことへの禁忌感を感じ取ったに違いない。それならば、この〈メノラー〉の存在は確かに俺にとって良い牽制と言える。もう一度言おう、最悪

だ。

〈メノラー〉は複数存在する。そしてその所有者同士はそれを奪い合う運命にある。では、俺以外の所有者は誰なのか。万人に等しく凶事と死を撒き散らすモノ、理外の存在〈魔人〉。それらが他の〈メノラー〉を所持しており、真・女神転生IIIでは事ある毎に主人公修羅の行く手を阻み、その凶悪な能力でプレイヤーを恐怖のどん底に陥れた。

俺がコレを所持した事で〈魔人〉に何時、何処で襲われてもおかしくない状況になってしまった。しかもあの喪服の女、最後に最悪な情報くれやがった。彼女は言った、「マガタマ」から取り出せば、周囲の人も共に運命の場に巻き込まれる」と。つまり、俺がこの〈メノラー〉を取り出す、或いは手放せば、無関係の人が〈魔人〉に襲われる可能性が非常に高くなるという事だ。

そしてこれを所持している俺は、今後何の前触れも無く死の体現者と戦う運命を背負った訳だ。これまで以上に力を求めざるを得ないし、俺が敗れば〈魔人〉達がその後この世界に凶事と死を撒き散らすのは想像に難しくない。

巻き込めない。誰もこの運命に巻き込めやしない。何が共に運命の場に引き込まれるだ。仮に今後新しい友人を作れたとして、その人を死の体現者との戦いに巻き込むか？絶望への道連れにするか？

〈メノラー〉は決して〈マガタマ〉から取り出さない。まんまと乗せられているのだろうが、俺には元から選択肢は無い。今後待ち受ける運命を相手に生き残るには強くならねばならなかった。今もそれは変わらない。ただ、明確な基準が現われただけだ。

単独で〈魔人〉と戦い、勝つと言う絶望的な基準だがな。

ハハハハハ、笑えるな、おい！

「……俺が力を求めない場合、周囲の者を巻き込むと言いたいのだろう。いいさ、乗ってやる。」

父さんも母さんも良い両親だ。俺の価値観、倫理観は彼等に大きく影響されて成長した。息子がこんな運命を背負って居ると知れば必ず悲しむ。いや、母さんは怒るか。兎に角、彼等を巻き込むのは無し

だ。

八百万とは別の道を進めて本当に良かったと今は前以上に思っている。彼女は結構天然な所があるが、妙に鋭い所もある。下手に探られてこの狂った運命に巻き込まれていたなら、俺は正気で居られる自信が無い。

〈人修羅〉が力を求め続けた結果〈混沌王〉に至るのに、俺は回りを巻き込まない為に力を求めざるを得なくなった。仮に〈混沌王〉へ至らなかったとしても、恐らくその先に俺の人としての居場所は無く、今後人との繋がりを作れば、崩壊の運命への道連れ候補と成る得る。ああ、油断していたな。覚悟したつもりだったが、足りなかった。分かっていた筈だ、高校入学が何かのトリガーになることは。

「……俺の女神転生はここから始まるのか。」

救いは無く、選択肢はそれぞれ違う破滅の未来。進む毎に掌から大事なもの零れ落ち、最後には自分一人しか立っていない。実に女神転生らしい。最強へ至る事を回避するために強くなるしかない。もう、どうにもならないんじゃないか。

ダメだ、ネガティブになってしまっている。

思考がループする時は碌な結論に至れないと誰が言ったか……ああ、八百万が似たような事を昔俺に言ってたか。まあ、実際そうなっている訳だ、一旦リセットしよう。難しいかもしれないが、この状態で父さんと母さんと顔を合わせれば、確実に俺が何かを抱えているとバレル。特に母さんの直感は獣染みた所がある。

空元気でいいから、思考を変えなければならぬ。そうだ、他に道が絶対に無いとは限らない。まだ始まったばかりなんだ。更に悪化する可能性にはこの際、全力で目を瞑ろうじゃないか。

それに絶望だけじゃない。俺には一点だけ、この世界に生まれて非常に幸運だったと思う事がある。

俺は人に恵まれた。父さんも、母さんも、八百万も、こんな俺に話

しかけてくれたクラスメートでさえも、全員素晴らしい人達だった。ああ、道は必ずある筈だ。苦しませてなるものか。巻き込んでやるものか。例えこの先世界が大きな流れに飲まれようとも、見つけてやる。皆の居場所を守る道を。必ず。

結果〈俺〉が世界から居なくなつたとしても。

・  
・  
・

「おはよ、人修羅。珍しく遅いわね、貴方が最後よ……早く食べてしまいなさい。」

「おはよう、修羅坊。試験での疲れが出ちまつたか……今日はゆっくり休みな。」

「おはよう、父さん、母さん。」

ああ、ダメだ。母さん所か、父さんもこつちを見た途端に何かを察している。微妙に嬉しく思ってしまうのは、仕方が無い事なんだろうな。自分の中で親に甘えたい気持ちと巻き込みたくない気持ちがせめぎ合っている。正直言つて、未だ俺の精神は成熟しきっていない。前世の記憶を中途半端に持っているせいで大人びて見えるかもしれないが、これまでも散々迷ってきたし、親や周りから強い影響を受けて育ってきた。

前世の影響は確かにあるのかもしれない。しかし俺は文字通り転生したのだ。俺は阿久間人修羅。父さんと母さんの子供なんだ。

「人修羅、あんたが私達に話してくれるまでは、気付かない振りしとくわ。何か知らないけど、一人で解決できるつて言うなら、やってみせなさい。」

「千晶、気付かない振りはどこ行つたのさ……ま、俺も同意見かな。自分の矜持を侮辱しない限り、好きにしろ。男の子だもんな、修羅坊も

な。」

これだ。これだから、俺はファザコンでマザコンになってしまった。優しい言葉より、よっほど俺に刺さる。この信頼に、俺はどう答えればいい？どうすれば、俺は……

「私はこのまま会社へ行ってくる。今日の重役会議、資料をもう一度チェックしたいから早めに出るわ。勇はもう少しゆつくりする？」

「いや、行き先一緒なのに別々に行くのもなんですよ。俺も行くよ。他のデザイナーと話し合っていた新しい構想が固まってきたからね。早めに行ってラフだけでも描いておくさ。」

「いつていらつしやい、二人とも……ありがとう」

「ふふ、何の事かしらね。じゃあね、人修羅。」

「雄英受かったら寮生活になるんだろ？家が少し静かになっちまうなあ。」

じゃ、いつてくるな、修羅坊。」

涙腺に来る事言わないで欲しい。

今の会話で分かると思うが、母さんは会社勤めの人だ。祖父の興した会社で若い時からメキメキ頭角を現し、今では役員の一人を務めている。若くして出世が早いとやっかみも多そうだが、反対派閥は今ももう無いらしい……詳しい事は怖くて聞けていない。

父さんは、母さんとの結婚を機に主夫に専念してきたが、数年前に母さんの進めで、会社が新しく設けたファッションブランドの部門でデザイナーとして雇われた。元々デザイン関係の大学を出ていた父さんはオシヤレに強い関心を持っていたらしく、俺が中学に上がって安心したのか、この仕事を引き受けた。才能は元々あったらしく、若者を中心に結構人気のブランドになっていているらしい。残念ながら俺にはその才能は引き継がれなかった。普段着なんてジャージやパーカーで十分じゃないかな。

ああ、二人のお陰で少し気が紛れた。悲観してても始まらない。も

う賽は投げられたのだ。あの試験に受かったかは分からないが、俺が行く高校が雄英であろうが、他のヒーロー高校だろうが変わらない。巻き込まない為にも、守るにも、生き残らなければ、話にならない。

対策は必要だ。実技試験での実戦を経て、課題も見えてきた。やることは山ほどある。

一つ一つやっていこう。希望を見失わなければ、一步でも前へ進めるのだから。

八百万。兄さんは頑張ってるからな。お前もお嬢様学校で大変かも知れないけど、お互い頑張ろうな。



## アクマとヒト

教師陣が退出した後、今回の決定をもう少し纏めると残った校長は一つの資料を手に取った。刺青を顔に施したような容姿。鋭い眼差し。こんなにも自分の心を乱されるのは何時振りか。

「立場が上の人間が残業するのは感心しないね。皆帰り辛い上、身体に良くないよ。」

振り返るとそこには小柄の年配の女性が立っていた。顔にはバイザー、トレードマークの白衣を着込んでいるこの人物は学校自慢の看護教師で、校長とも旧知の仲だ。

「リカバリーガール。皆と一緒に帰ったんじゃないのかい？」

「あんたが心配になって残ったのさ。さっきのあれは何だい？他の教師は納得していたみたいだけど、相澤先生は明らかに不審に思っていたわね。何故あんな分かりやすい言い訳を……？」

彼女が直接言葉にすることは無かったが、例えば個性が無くとも雄英高校の校長の根津には件の生徒、人修羅についてであると分かっただろう。今正にその事で頭を悩ませているのだから。

「ねえ、リカバリーガール。僕の〈個性〉ハイスペックは頭脳的能力を人間以上に著しく上昇させている。当然、これまで見聞きした事を忘れた事なんて一度も無いと思っていたんだ。」

「いきなり何の話だい……思っていた？」

「そう、思っていた。僕はこの生徒の書類を見て初めて知ったし、接触した覚えも無い。でも、彼の写真を見た時、僕はこう思ったのさ、「あ、人修羅だ」ってね。」

「……」

眉間に皺を寄せ、怪訝そうな表情をする。根津の言っている事は不可解だ。話の前後が繋がらない。何が言いたいのか。

「僕はね、知らない事を知ると言う体験は何物にも代え難いものだと思うっている。教師として未知を、新しいものを生徒に教えられる立場は素晴らしいものだと思負している。

でもね、知らない筈のモノを知っている体験なんて知らない。聞いたことが無い。コレは恐ろしい体験だったんだ。」

校長の表情に若干狂気が混じりだす。リカバリーガールも彼と長い付き合いだが、こんな表情は始めて目にする。

「昔はね、自分が何者なのか、どうして自分のような存在が生まれたのか悩んだものさ。〈ヒト〉ではなく、動物が個性を発動した自分の存在意義を探していた若い頃は今となっては笑い話さ。」

それがあの少年を見てから、蘇ってきた。何故僕は彼を知っていた？誰かが僕に何らかの〈個性〉を使ったのか。意図は？これは僕の出自に関係しているのか？彼は何者なのか？

未知が恐ろしく感じたのは久しぶりだ。」

「根津、アンタ……」

思わず本名で呼んでしまう程度には彼女も動揺し始めていた。彼の言葉が真に迫っていた事もあるが、校長に〈ヴィラン〉の魔の手が既に掛かっている可能性が浮上してきたとなれば、心穏やかではいられない。

「伝手を駆使して、資料も漁って彼について調べたけど、有用な情報はまったく得られなかった。杞憂かと思う事にして、今日まで過ごしたけど……今日彼をモニター越しに見て懸念は確信に変わった。」

動物のような頭部は既に表情をなくしている。

「情報が頭に浮かぶんだ。アレは〈アクマ〉じゃないって。アレは〈ヒト〉ではないって。」

「アレは……〈人修羅〉だってね。」

彼が少年の名を呼ぶ時、リカバリーガールは違和感を覚えた。聞き逃すような差異だが、言葉のニュアンスが若干違うように感じたのだ。人名ではなく、一般名詞を指している様な……

「この出所不明の知識の意味も理解できないんだ。彼の〈個性〉は確かにフアジーな〈悪魔〉ではあるけれど、〈アクマ〉じゃないと言えるほどのモノじゃない。〈ヒト〉ではないは更に意味不明だ。彼は確かに実の両親から生まれた〈人間〉だ。でも……」

「無視も出来なかったんだね。もしこれが誰かの〈個性〉によってもたらされた情報なら、警戒しないわけにはいかない。」

校長、わざと彼を補欠合格にしたんだね。悪い意味で特別扱いするために。」

「もし彼が無罪潔白なら悪い事をした事になるけど、監視の眼は必要だ。でも困った事にこの件に関して根拠はまったく無い。」

ならば彼を特別な存在に仕立て上げるのが手っ取り早かった。他が勝手に注目してくれるし、〈ヴィラン〉と何かの繋がりが見えてきたら儲けものって訳さ。」

教師としては憚れる行動だが、彼はヒーローの卵を預かる高校のトップだ。あの〈知識〉に何らかの意味があるのなら、他の生徒を巻き込みかねない。しかし彼を不合格にすると、裏に居る存在を見逃してしまう。それに結局自らに〈個性〉を使われた痕跡は見つからなかった。謎が多すぎる。

懸念は少ないほうがいい。生徒も彼が校長のお情けで入学したと見れば、少なからずそういつた目で見えてくれる。不審に感じている相澤先生も彼を見極めてくれるだろう。

「危険な賭けだよ。この少年が本当に裏と繋がっていたなら、獅子身中の虫。学校の存続に関わる大事件に発展しかねない。」

「それでも、彼を目に見える所に置いておきたかった。教師達に彼を合格にしたのは個人的な理由と言ったのは、強ち間違いじゃないのさ。」

校長の言葉を聞き、目を瞑り、小さくため息をつく。彼は常の状態ではない。いつも冷静であり、情報を見極め、胡散臭くも全体の利益を優先していた姿とは異なって見える。だが、異常と言える程の違いではない。人は感情の生き物だ。超人的頭脳を持つ彼も例外ではなかったにすぎないのだろう。

「分かった。私もできる限りフォローはするわ。でも相澤先生には時間を見つけてしっかりと説明するんだよ。仮にも自分の担当するクラスの問題なんだからね。」

「……君の言う通りだね。僕も冷静じゃなかったのかな。」

分かった、折を見て話し合ってみるよ。」

話は纏まり、教師達に宣言したように、根津校長は今回の合格者の情報の整理し、書類に纏める。先ほど話題に上がっていた少年の資料を目にする時、確かな狂気がそこにはあった。

・  
・  
・

今朝の両親との会話ですっかりセンチな気分になってしまった。冷静に考えてみれば、俺の置かれている状況は初期想定とあまり変わらないのだ。つまり俺は弱く、迫り来る運命は熾烈にして残酷で、強くなければ生き残れず、強くなりすぎるとヒトの道から外れて戻って

来れなくなると言う訳だ。

改めて聞くと酷い内容だが、生まれた時から考えていた来るべき始まりとそう懸け離れたものではない。だが実際想定していた運命の輪が実際廻り始めると自分の置かれている悍ましい状況が現実味を帯びて恐ろしくなる。それに「アマラ深界」、或いは「魔界」を夢で垣間見た直後の俺は錯乱状態に近かったのかもしれない。

何はともあれ、明確な基準が設けられた。「魔人」と言う理不尽を倒せる事が前提ではあるが、生き延びる目はあるということだ。魂の器の拡張に伴い、習得した「フオツグブレス」も俺に大きな希望をもたらしてくれている。この「スキル」は格上殺しに成り得る優秀な捌め手だ。活用しない手はない。

更に実戦を経験して気付かされたのは自分の立ち回りの弱さだ。ゲーム中の人修羅は生まれた時から悪魔が蔓延る中で戦闘を続けて実戦の立ち回りを習得していったのだろうが、俺は自主錬と脳内シミュレーションしかしてこなかった。戦闘での想定外に非常に弱い。今後高校に通う傍ら、どうかしてこの欠点を補いたいが、一人ではどうしようもない問題だ。人を頼るにしても伝手がある訳でもないし、少し考える必要がある。

「魔人」が何時襲ってくるかだが、考えて見れば警戒しても無駄だと分かった。アレは地震や津波と同じ災害だ。警戒したからといってどうにかなる存在ではない。故に対処法も同じだ。来た時に備えて心構えをしつかりして、慌てず行動する。出来るかは兎も角、来る前に焦ってもどうしようもないのだ。少なくとも理屈の上ではそうだ。今も自分を蝕んでいる心の焦燥を入学までには何とかしたい所ではある。

つらつらと色々考えていると、ふと時計を見れば両親が帰ってくるまで時間がそんなに無い事に気付いた。今日は二人に救われた部分もあるし、料理でも作って驚かせてみよう。凝ったものを作れる訳でもないの、無難にカレーを選択。冷蔵庫を覗いてみると昨日の料理で消費し切れなかった豚肉と春野菜があった。定番の人参とジャガイモは無かったので、玉ねぎと豚肉のシンプルなカレーを作った後に

軽く炒めた春野菜をトッピングで乗せる事にした。油で揚げる方が美味しいと思うが、自分の料理の腕と手間と後片付けを考えると断念せざるを得なかった。

・  
・  
・

「おおー、修羅坊！家に帰ると料理があるなんて最高だな！

思ったより嬉しいもんだ……！」

「大げさすぎだよ、勇。ありがとね、人修羅。」

「何だよ、千晶だってにやけてるじゃ……いや、何でもないよ。」

「そう、それは良かった。」

二人は思ったより喜んでくれて、何だか照れくさく感じてしまった。大した料理ではないし、昨日の二人が作ってくれた物とは比べる気にもなれない。でも美味しそうに食べる父さんと母さんを見ると、心にあつた言いようの無い不安が少し和らげられている気がする。

「修羅坊を応援はしているけど、雄英の寮に行つて欲しくないって思っっちゃうなー。」

「そんな事、冗談でも口にしないの。合格発表の通知は直接住所に送られてくるらしいから、用がないならその日は外出しないようにね、人修羅。」

「分かったよ、母さん。」

高校生活か。知識として生まれた時からある訳だが、実体験としての記憶ではないし、そもそもヒーロー養成学校のカリキュラムや設備が当てはまるかは未知数なところがある。変にクラスメートを巻き込みたくないのだから友人を作るわけにはいかないが、当たり障りの無い

知人として楽しく過ごせればいいなあと妄想してみる。失うその日までは日常を謳歌したい気持ちが無いわけではないのだ。無理だと知っていてもね。

「お、この炒め物父さんの使ってる秘伝の調味料使ってるな。」

「ただのスパイスを混ぜ合わせたヤツでしょ。美味しいけど。」

「絶妙な割合で混ぜてるんだよ！この味出すのに一年は研究したんだからな。」

「はいはい。」

二人が言い合う姿を見るのも残り少ないと思うと目頭が熱くなる。高校で楽しく過ごしたいと思うのも両親との日々の代替を無意識に求めているからなのだろうか。

「そうそう、人修羅。今晚少し母さんに付き合いなさい。多分相談する気無いでしょう?。」

「……え?。」

「私、頼られるのを待つ性分じゃなかったわ。じゃあ、十時ごろお話しましょ。」

急な話に頭が空っぽになると、父さんが優しく俺の肩を叩いた。

「がんばれ。」

その目は優しく、同時に同類を見つめるような色をしていた。

## 自身とコトワリ

生まれて暫くして人修羅である現状を理解した頃、俺はふと疑問に思った事があった。俺の記憶についてだ。臃げな前世の虫食いの記憶。商品名や人名などの固有名詞が殆ど失われており、ついでに自分やその周囲についてもほぼ忘れている。何故か真・女神転生についての記憶は異常なほど覚えているのだ。

その時、俺の脳裏に浮かんだのは恐ろしい仮説。自分の記憶すらあのルシファーによって捏造されたものではないのかと、思ってしまったのだ。それからは、何一つ「自己」について確かな事が無かった俺は非常に不安定な状態となった。赤子の身であった事もあり、精神的に弱った俺は良く泣いた。

自分を支えていた土台は自分の前世の存在だったのだ。自分が自分であるために運命に立ち向かおうと思った矢先に、その土台があまりにも不確かで不安定な物であると自覚してしまった。ただただ目に見えない不安に押しつぶされそうになっていた時、俺を救ったのは母さんと父さんの愛情だった。俺を安心させようと二人に優しく抱きしめられ、親としてかけられた言葉は前世と言う不確かな物とは違う、確かに感じられる、俺にとつての真実となった。

ただ生き残るために運命に立ち向かおうとしていた胎児の時とは違い、二人の想いに触れたてからの俺はこの世界の人間として、もう一歩進んだ気がした。

転生者としての俺と二人の子供としての俺、この二面が俺の真の意味での土台であり、今の俺を形作ってきた。

・  
・  
・

「来たわね人修羅……そんな顔しなくても苛めるつもりは無いわ。」



戦々恐々と呼ばれた時間にリビングに行ってみると、母さんが既にソファアームに座って待っていた。どんな表情なんだこれは。楽しそう？

「あなた今悩んでいるでしょう？何についてかは分からないけど。

ふふふ、いいわね。ついに思春期突入か。」

思春期？何の話だ？俺が悩む事と思春期に何の関係があるというのか。

「怪訝な顔しているわね……分からないか。人修羅、あんたこれまで自分で色々決めてきたけど、悩んだの何て初めてだって自覚ある？」

いやいや、そんな馬鹿な……あれ？可笑しいな、悩んだ記憶は全て来るべき未来をどうするかについてであって、何かを決めるのに悩んだ記憶って確かにあまりないぞ……

「その様子じゃ、やっぱり自覚無かったか。この際だから言ってしまうわ。あなたが今まで悩まなかったのは取捨選択してきた決定が基本的に私か勇の価値基準を使ってきたからよ。」

「……え？」

ガツンと頭に衝撃を受けたかのように錯覚した。母さんが言った言葉があまりにも唐突過ぎて理解する前に疑問符で脳内が軽くパニック状態だ。

「人修羅、あなたは今まで私達の意見に異を唱える事なんて殆ど無く、模範的なすつごくい子だったわ。

私はあなたに力なき意思に意味は無いつて教えてきた。あなたはそれを当然だと言わんばかりに受け入れたわ。」

まあ、力が無かったら生き残れないし……女神転生だし……そりやねえ？

「勇が自分を第一に考えろって言った時も、すごく納得していた。」

人に構ってる余裕が無いし、自分を助ける事が結果的に世界を救う事になるから……

「私や勇は自分と家族さえ無事なら、最悪周りは切り捨てるわ。でも私達と違って、あなたは他人を簡単に見捨てられない。」

……あなたが思い悩んでいるのってコレ？」「!?……どうしてそれを。」

エスパ―か。読心術の権能なんて持っていたのか、母さん。

「単なる鎌かけよ。でもやっぱり思春期じゃない。ついに人修羅も反抗期かあ。感慨深いわね。」

「反抗期？いや、別に母さん達に反抗なんてしてないと思うけど。」

少なくとも俺にそんなつもりなんて無いぞ。

「バカね、反抗期って言葉の通りだと思っていたの？」

そうじゃなくて、反抗期って言うのは親の価値観とぶつかり合っ  
て、自分だけの価値観を導き出すプロセスの一部の事よ。「親の言う  
事は何でも正しい」から「親の言う事は本当に正しいのか」って形で  
意識が変わって、悩むことが増えるの。基本的に新しい思想に触れる  
いい切欠になるわ。」

普通に初耳だ。

「だから直接反抗しなくても、親と違う考えや思想を持ち始めたら、ある意味反抗期の始まりなのよ。」

人修羅、あなたは今自分だけの価値観や思想を持つためのスタートラインに立ったの。」

……思想？価値観？

何だこの既視感は。母さんは実にいい顔をしている。嫌な感じがする。いや、母さんにじゃない。もっと、記憶の底にある何かが……

「別に私達が教えた価値観を捨てろって話じゃないわ。優先順位の話なのよ。私は力が何より大事。勇は自分が一番大事。重要な選択の時、私達は迷わずこれらを優先する。だから人修羅。高校生活の中で、あなたも自分にとっての一番を見つけてなさい。」

そうすればきつとその悩みも乗り越えられるわ。」

俺にとっての一番。俺の思想……？

「じゃ、言いたい事言ったから寝るわ。お休み、人修羅。」

「え、俺の悩みについて聞きたいんじゃない？」

「息子の悩みを無理に聞く趣味は無いわ。今の話は高校入学前の餞別よ。大いに悩みなさい、若者。」

じゃあね。」

手をヒラヒラして母さんはリビングを去っていった。

しかし俺はそれ所じゃない。記憶を漁って募る不安を拭い去ろうと必死だ。思想、そう思想だ。この言葉が引っかかる。真・女神転生ⅠⅠⅠにおいて思想と言えば……へコトワリ？

「俺にへコトワリを啓けてっのか、母さん……」

ソファアで小さく呟く。真・女神転生ⅠⅠⅠで重要なファクターであり、分岐でもあるへコトワリ。新たな世界を生み出すために必要な

強固な思想。作中では主人公の友人達や初期の黒幕がそれぞれ別の〈コトワリ〉を啓き、どの思想を選択するかでエンディングが分岐した。

そう、作中人修羅は自分では〈コトワリ〉を啓けないのだ。他人の思想に添う事しかできない。或いはだからこそ、真の意味で〈アクマ〉となる〈混沌王〉ルートが生まれたのかもしれない。

逆に言えば、だ。母さんの言うように俺が自分なりの〈コトワリ〉を啓けば、〈混沌王〉へ至らない可能性が高まる訳だ。確実とは言えないが。

俺が思春期なのかは兎も角、この高校生活は確かにチャンスだ。人と接し、精神的に成長し、自分だけの思想を身につけるのだ。問題点是人との交流で多くの思想に触れる事が望ましいのに、人と必要以上に仲良くしないようにする事の難易度の高さか。

いや……無理だろ、これ。

・  
・  
・

母さんと話してから暫くして、雄英高校から一つの映像媒体が送られてきた。合格の可否は映像で伝えてくるらしい。ハイカラなのは結構だが、自分としてはさっさと紙で結果を伝えて欲しかった。仕方なく映像を再生すると、ネズミのような頭部を持った子供ほどの背丈の人型の生物が映し出された。正装に身を包んだそれは自らを雄英高校の校長を名乗り、俺の補欠合格を伝えてきた。何でも筆記の結果も実技の結果も問題は無かったが、俺の〈個性〉の情報が実際の物とは異なったため、評価の足を引っ張ったとか。

〈個性〉関連の申請は結構面倒で、情報更新のために態々専門の病院予約して診査して役所で更新申請して、とまあ手間が掛かる。ついでにそれによるメリットは無いに等しい。殆どの人は子供の頃に行っ

た個性診断の結果をそのまま使っている。

俺の〈個性〉は〈マガタマ〉由来の能力であるため、汎用性が高いが、言い換えれば万能に過ぎる。一つの権能で現すには無理があったのだろう。

こちらとしては補欠だろうと何だろうと、合格できたのなら文句は無い。映像の校長先生の話が終わり、父さんと母さんに合格を伝える事を考えていると、場面が切り替わり、なんと校長の代わりにオールマイトが映っていた。なんでも彼がこの新学期から雄英の教師を勤めるとか。少なからず、この情報は俺に衝撃を与えてくれた。

オールマイト。平和の象徴。ナンバーワンヒーロー。その名に恥じぬ実力と性格を持ち、数々の伝説を築き上げたバケモノだ。〈アナライズ〉を習得してからテレビ越しに彼のレベルを測定してみたが、結果は〈UNKNOWN〉。自分より圧倒的格上や〈BOSS〉属性の敵の場合に見られる測定不能の別名だ。感覚的にレベル五十オーバーだと思っていたのが、上限不明のバケモノだと知ったときは乾いた笑いが漏れたものだ。

彼はこのMAGが溢れる世界においても異質であり、圧倒的だ。それゆえ、俺はある一つの仮説を立てた。彼がこの世界の実質の支配者ではないかと言うものだ。何も無根拠に言っているわけではない。通常、〈異界〉にはMAGが満ちており、そこに発生する悪魔はその支配権をめぐって争うことがある。何故ならその支配者になれば、他の悪魔たちからMAGを徴収したり、特殊なルールをその異界内で敷く事ができるのだ。オールマイトが意識的にこの世界のボスになっているかは判断が付かないが、彼が多くの人間に信仰されており、秩序と言うルールを敷いているのは間違いが無いと思われる。

彼の理不尽な実力も何割かは人々の信仰心から彼に流れるMAGの影響もあるのだろう。彼が突然変異レベルのバケモノである事には変わりはないが。

さて、何故俺が長々と仮説を語ったのかと言うと、目の前に移っているオールマイトから感じ取れるMAGの威圧感だ。明らかに以前見た映像の時より落ちている。原因が何かまでは分からないが、衰え

ている。それも結構なスピードでだ。

もし彼が本当にこの世界のボスであり、秩序と言う名のルールを敷いていたのなら、オールマイトが一線を退いた時、誰が代わりに立ち、どのようなルールを強いるのか。長らく続いた平和な時代は終わりと告げるのかもしれない。

何より、タイミングが良すぎる。俺が高校に入学する時期にオールマイトが明らかに弱体化しており、更にそんな重大人物が俺が入学する高校に教師として活動すると言う。これで何も起こらないと思えるのなら、それは嵐の日に川の様子を見に行くくらいには能天気な人間だ。

オールマイトに取って代わろうとするものは確実に現れる。或いはその後継者になろうとするものかもしれない。ある意味ではこの世界の〈ヘメシア〉であるオールマイトを信仰する狂信者達が暴れまわるかもしれない。最悪を想定するなら、抑圧された歪な〈個性〉社会の秩序が異形型などからの攻撃を受け、現体制が崩壊するかもしれない。

全ては杞憂であれば、笑い話で済む。俺は備えるしか出来ない。最悪に備えて。

今はただできる事をしよう。待ち受ける高校生活に不安と僅かな希望を抱いて。

## 再会と新たな仮説

ああ、とうとう入学初日だ。先日は両親に非常に青いやり取りをしたわけだが、これに関してはもう開き直る事にした。この思春期特有の精神のブレも俺がまだへヒトの範疇に納まっている証拠だと捉えるならば、受け入れざるを得ない。例えば後日気恥ずかしくなって、ともに親の顔が見れなくなったとしても、受け入れるしかないのだ。

「くそ、せめてあのやり取りが入学前日だったら……！」

過ぎた事を蒸し返しても仕方ないので、今直面している状況に目を向けてみよう。既に校舎は近く、早めに登校したと思っていたにも拘らず、結構生徒の姿を見かける。ちなみに手荷物は鞆だけだ、寮で使う荷物は事前に送ってある。片っ端からヘアナライズを発動しながら適当に歩いていると、見慣れた人物が前方に見えた。実技試験中に出会った異様にキラキラした少年だ。

「あ、キミ！また合ったね☆キミも無事合格していたんだね、よかった！」

どうやら結構心配していたようだ。気絶する前に最後に見たのが彼だったから、印象に残っている。

「試験の時は世話になった。遅くなってしまったが、ありがとう。」

「ふふ、何を言っているんだい。キミも身体を張って周りの受験生達を守ったって聞いたよ。そんなキミを助けるのは当然じゃないか☆」

そう言いながら白い歯を煌かせながら髪を掻きあげる仕草は様になっている。まるで劇のワンシーンを見せられている気分だ。

「そう言ってもらえると助かる。自己紹介がまだだったな。阿久間

……人修羅だ。」

「うん？なんだか変な間があった気がするけど了解だよ！僕は青山優雅、よろしく☆」

正直自分のことを「あくまひとしゆら」と名乗るのは未だに抵抗がある。人修羅が自分の名前だっつていい加減受け入れてはいるが、この名乗り方ではまるで俺が人ではなく〈悪魔〉だと認めてしまっているようで……理屈じゃなく生理的な嫌悪を感じる。

「じゃあアクマくん、よろしく☆」

「いや、その呼び方はアウトだ」

往年のアニメ主人公のように呼ばれるのはノーサンキューだ。話し合いの結果、俺の事は人修羅と呼んでもらう事にした。付き合いもまだ浅い事もあり、青山は苗字呼びを拒否する理由は深くは突っ込んでこなかった。こちらとしては非常にありがたい。他に知り合いもない事だし、青山と雑談を交えながら巨大な校門を過ぎる。

近未来的なデザインの校舎やその規模に驚きはあったが、校内を歩き何とか一年A組に辿り着いた。まだ生徒はあまり揃ってないようだ。

他に知り合いは……!?

「八百万!?え、いや、は？」

一瞬勘違いかと思ったが、〈アナライズ〉は誤魔化せない。同じクラス奥の席に座っているのは明らかに幼馴染で自称妹分の八百万だ。どういうことだ。彼女はお嬢様高校へ進学したんじゃないのか？おいおい、これから始まるんだぞ？……ここが爆心地になる可能性が高いんだぞ？くそ、ダメだ、考えが纏まらない。

「あ、お兄様！やっぱりお兄様も合格していたんですね！」



嬉しそうに顔を綻ばせて手を振っている。ああ、暢気に、平和そうに……

「うふふ、やりましたわ。お兄様をビックリさせる事に成功しました！」

実は推薦入学で一足先に入学が決まっていたんですわ」

「そ、そうか。これからも一緒のクラスで学べるのは嬉しいな。これからも宜しくな」

「はいー」

俺は自然に笑えているのだろうか。巻き込むというなら先ほど自己紹介を済ました青山も同じな筈だ。しかし巻き込まないと安心していた気心の知れた相手がいきなり世界の命運を分ける戦いの中心地に訪れれば気も動転する。いや、〈人修羅〉と幼い頃から関わりがあつた時点で運命に巻き込まれていた可能性もあるのか……

「おや、何だい人修羅くん。既にこのレディーと知り合いだったのかい？」

「ああ、幼馴染なんだ。地元が一緒だね」

「始めまして、八百万百です。よろしくお願いしますわ」

「青山優雅だよ。こちらこそよろしく☆」

二人に内心の動揺を察せられても面倒だ。下手な言い訳を言っても、現在の不安定な精神ではボロが出そうな気がする。そうだ、今は悩むべきではない。ああ、くそ……最近心に柵を作る頻度が増えた気がする。今後起こりうる全ての懸念に対応していたら、いざと言うときに動けなくなりそうだ。自分の限界を見定めて、出来る範囲で対処していくほか無い。俺は万能でも、ましてや全能ではないのだから。くそっ、彼女が雄英に居る事さえルシファアの陰謀に思えてしまう。

……  
……  
……

二人と簡単なやり取りをしている内にクラスの席が埋まっていくな。何やら騒がしいグループもいたが、身内同士のじゃれあいらしく、騒動は無視して俺らは軽く互いの〈個性〉について紹介し合っていた。ここで驚いたのが青山の〈個性〉についてだ。

まず俺が以前から立てていた仮説である〈個性〉≡権能と個人が持つ〈名〉の関連性に当てはまらない。試験の時に印象に残った事もあり、名前から彼の〈個性〉についての推測をしていたのだが、それらは見事に外れていた。苗字から自然由来の権能か、或いは名前の通り魅了のような権能を發揮しているかと思っていたが、実際には腹部から発光するエネルギーをビーム状に撃つ〈個性〉だという。

しかも反動で体調不良を起こすおまけ付きだ。これを聞いた時、当初は俺の仮説に穴があるのかと思っていたが、彼が言うには稀に〈個性〉が本人に合わない場合があり、自分の体調不良はそのケースに当てはまりと言うのだ。

つまりは、だ。その反動とやらは〈名〉と権能の間に齟齬が発生しているから起こる事ではないのか。神格を定義付ける〈名〉と本人が実際に操る権能が違えば不具合も発生するのではないか。俺が以前立てた仮説が正しいのなら、この新たな仮説も筋が通る。より核心に迫るためには他のケースも確認する必要があるか。

情報は力だ。今後起こるであろう時代の節目を乗り切るためにはより多くの情報を手に入れなければならない。懸念は増えるばかりだが、備えは必要なんだ。

他愛無い会話を続けつつそんな事を考えていると予鈴が鳴り、ホームルームの時間が来たにも拘らず、担任の先生が見当たらない。不思議に思っていると寝袋がもぞもぞと入り口から侵入してきた。寝袋の中から目は目の周りに深い隈を作った男が立ち上がった。

強い。格上なのは確実だ。

〈アナライズ〉が効かないため、レベルは感覚でしか分からないが、50前後だろうか？隙が見当たらない。

彼は軽く騒いでいる連中を戒めると自己紹介を始めた。

「担任の相澤消太だ」

周囲は啞然としているが、彼が教師である事がそんなに意外だったのか。彼から溢れるMAGから実力を測れないのだろうか。MAGの濃度もそうだが、奴の立ち姿は余りにも隙がなさ過ぎる。実戦経験豊富な戦士のそれだ。雄英に入るほどの力を持つなら少なくとも先生の実力の片鱗くらいは感じ取れる筈だが、最初の奇行と見た目のインパクトに惑わされているのだろうか。そもそもメガテンの登場キャラクターは一癖も二癖もある連中が多い。毎回驚くつもりが無いのなら皆も今の内に慣れたほうがいい。

「体操服着てグラウンドに出ろ」

有無を言わせないと言った感じで放たれた指示にクラスメートは慌てて動き出す。ついでに回りに軽く自己紹介をしているようだ。ヒーロー育成高校ともなるとまともな自己紹介もさせずにいきなり授業へと移行するのだろうか。しかし、この流れだと俺もクラスメート相手に自己紹介をすることになるのだろうか……

「人修羅だ。出来れば苗字の阿久間ではなく名前でもらえると嬉しい」

これでどうだ。悪魔くんの悲劇を繰り返してはいけない。

「名前呼びなら兎も角、苗字を嫌がるなんて珍しいね。えと、人修羅君、でいいのかな」

「何か事情があるのかもしれない。あまり深く聞くのはマナー違反に

なるぞ諸君！」

「阿久間……？もしかしてあの人気ブランドの？」

「ああ、父がメインデザイナーを務めているが……よく分かったな」

ピンク髪の少女が反応した。そうか、父さんのブランド、若者に結構人気が出てるんだったか。クラスメートが話題にしていたと今度父さんにメッセージを送つところ。態度には出さないかもしれないけど、多分喜ぶだろう。

「そっか、親が有名だとヒーローになってもコネのお陰だとか色々勘ぐる人出てくるもんね」

「ああ、そう言う……すごい親がいるのは羨ましいけど複雑ー」

何やら勝手に勘違いが始まってしまった。苗字呼びが嫌なのは確かなわけだし、無理に訂正する必要も無いだろう。

騒がしくクラスメートと親交を深めつつグラウンドまで辿り着く。既にグラウンドで俺らを待っていた担任の相澤先生は静かに告げる。

「全員揃ったな。これから個性把握テストを行う。」

新しい仮説の名前と権能の関係性の検証は思ったより早くできそうだ。

## クラスメートと仲魔

個性把握テストとやらを始める前に相澤先生は「最下位が除籍処分になる」と言った脅しともとれる発言をした。生徒に発破をかけているのか、或いは本気で入学初日に厳しい受験を超えてきた生徒を追い出すつもりなのかは判断がつかなかった。

そもそもフィクションでもなければ学校の一先生が自己判断で生徒を退学させる権利なんて無いはずだが、ここはメガテンの世界。何が正常であり、そうでないのかの判断をする為の基準が俺の中には足りない。そもそもこの雄英高校はヒーロー育成という特殊な場であり、他の学校との差異が想像できないのも判断基準の曖昧さに拍車をかけている。

と長い前置きをしたが、結局やることは変わりはない。個性把握テストと大層な名前に身構えていたが、実際は体力測定と何ら変わらない内容のものであった。名前の通り、〈個性〉を使ってもいいと言う一点を除けばであるが。

ここで問題となるのが俺の〈個性〉の汎用性だ。そう、〈人修羅〉の持つ〈スキル〉はどれもこれも癖が強く、多くが戦闘に特化している。しかも多少の汎用性を見せるスキル群も習得はまだ遠い。つまり、おれは素の身体能力で頑張るしかないのだ。

幸い俺以外にも応用の利きにくい〈個性〉を持つクラスメートは数人居り、肉体のスペック上、俺が最下位になる可能性は非常に低い。ならばこれを機にクラスメートの〈名〉と〈個性〉を把握し、俺の仮説の補強をしよう。もちろん戦術や〈個性〉の応用を参考にすることは忘れない。前回の戦闘の時に自分には色々足りないことは把握済みだ。

テストが始まってみれば、クラスメートはそれぞれ見事に自らの〈個性〉を使用、又は応用し、常人ではありえない記録を叩き出している。その〈個性〉の種類も豊富で、放電や無重力発生、果ては透明化能力まで。まあ、流石に後者はこのテストに全く向いていない個性だが、本人は結構ガッツがあるらしく、女子にしては良い記録を出して

いた。

驚愕したのは芦戸三奈だ。酸性の溶解液を分泌する〈個性〉は強力だが使いどころの難しい〈個性〉だが、問題はそこではない。最初に彼女の名前と〈個性〉を聞いた時、名前の意味と〈権能〉が一致していない為青山と同じく問題を抱えているかと思っただが、そんな素振りは一斉見せなかった。

自分の仮説に疑問を持ち始めたとき、俺の脳裏に電撃が走った。そう、昔のヤンキーや暴走族が使っていた「夜露死苦」だ。これで「よろしく」と読む。酷い当て字だ。芦戸三奈、アシドミナ、アシド……アシッド。

阿保か。

馬鹿じゃないのか？なあ、馬鹿なのか？英語当て字もありなのか？俺はこれから英語にも気を付けながら〈名〉の分析をしなければならぬのか？〈アナライズ〉する度に？戦闘中は恐らく不可能だ。神の権能はワールドナイズされていたのか。俺が古い人間なのがいけないのか。

一気に疲れた気がする。しかしこのテストを通じて仮説は補強された。麗日お茶子は前述した触れたものを無重力にする権能の持ち主だが、名前を見るに当てはまっていない。そして案の定、能力を使わずに副作用で気分が悪くなるようだ。

同じく緑谷出久、以前目に留まったオタクっぽい少年は自分の能力に振り回されており、指を骨折していた。〈個性〉を使用した瞬間、彼の体から溢れんばかりのMAGが溢れ出したのを確認した。身体が能力に全くついていけないのだろう。彼の〈名〉からは自分が知る限り力に関係する〈権能〉は確認できなかった。彼もまたどこぞの強力な武神の権能に振り回されている人間なのだろう。

MAGの話に触れたから補足しておく、クラスメートを見て自分が如何に井の中の蛙であったかを認識せざるを得ない。今の俺を超えるMAGと圧倒的センスの持ち主、爆豪勝己。超攻撃的な性格と〈個性〉爆破を持ち、恐らく戦闘しても小細工なしには成す術もなく倒されるだろう。身体の使い方、個性の応用、どれを取っても他のクラ

スマートのレベルを大きく引き離している。MAGの総量、出力では他の追従を許さない轟焦凍。〈個性〉半冷半燃(氷しか使って見せていないが)も協力で本人も訓練を受けているのか身のこなしは常人離れしている。この二人は明らかに強い。アナライズでもレベルが不明と表示されているため、MAGの総量は俺を超えているのだろう。

未だ複雑な感情を抱いている八百万に関してはMAG総量が俺に迫るものがあり、尚且つ応用力はピカイチだ。反則的な万能性を発揮するが、造り出せる無生物は彼女が分子構造まで把握する必要があり、今後は目指すヒーロー像に合わせて範囲を絞り、より強力で特定条件下で効果を発揮するものを選択していく必要があるだろう。まあ、そんな展望とは無関係にこのテストでは一位は確実だろう。条件が有利すぎる。

さて、他人を散々評価しておいてなんだが、俺は結果は平均より少し下だった。八百万は予測通り一位をキープし続けたようだ。俺の場合、身体能力は高いが、増強系の〈個性〉ほどではなく、更に〈個性〉を応用し好成績を収めた者には追いつけない。混沌王とは程遠い成績でホツとしていいのか、情けないと嘆けばいいのか……いや、他の権能の使い方、応用力を見れたのは大きな収穫だった。このテストで死ぬわけではないのだから、この経験から得られるものは全て自分のものにするくらいの貪欲さが必要だ。

高校生活の始まりで今後真の意味でメガテンが始まるのなら、今の俺では力が圧倒的に不足していることは明白だ。前回の戦いで露見した応用力と経験の不足、クラスメート達から吸収できるのなら悪くはないが……どこまで彼らと交流したものか。

成り行きで懐かれた八百万は別として、これまで俺は極力他者とは関わらないようにしてきた。下手に親密になつて悲劇的な運命に巻き込む危険があったからだ。だがクラスメート達は俺と同じ学校に通っている時点で既に当事者だ。むしろある程度親睦を深め、互いの実力を高めあわなければ生き残れないかもしれない。

いや、下手に親密度を上げて彼らの中から「メシア候補」や「力才

スの体現者〉が生まれてしまえば悲劇は避けられない。真・女神転生において序盤の仲のいい同年代は後半裏切り他勢力に加わるのはメガテンお約束の一つだ。今の所この世界で唯一神系カルト宗教の〈メシア教〉の存在は確認できていないが、思えば〈個性〉を持たない者と持つ者の確執、〈個性〉の使用を制限している社会への反発、ヒーロー制度そのものへの不信感など、燻っている火種は多い。これらが何らかの拍子に表面化した時、カルト的な勢力に代わる可能性は少ない。

そうだ、真・女神転生は基本悪魔の存在の介入があれど、大体の騒動は人類の内ゲバで始まるんだ。これまではどちらかと言えば自身の強化に専念していたが、社会情勢などについてより注意を払ったほうがいいかもしれない。ああ、面倒極まりない。

クラスメートとの親睦にはもう一つ大きな懸念がある。あの喪服の女に渡された呪いのアイテム、〈メノラー〉だ。あれが発動すれば、ほぼ確実に周囲にいる俺の〈仲魔〉と認定されている者を巻き込んで魔人との戦闘空間に閉じ込められる。そう、〈仲魔〉だ。

女神転生の醍醐味の一つ、悪魔を説得、或いは戦いで調伏し、〈仲魔〉として従えて戦略を練り、戦うのがメガテンというゲームの基本だ。

ようは〈悪魔〉の仲間だから〈仲魔〉。ゲームでは契約によつて悪魔が〈仲魔〉となる訳だが、この世界の〈個性〉を持つ人間は皆一種の〈悪魔〉だ。仲良くするだけで〈仲魔〉扱いになるのか、誓約のようなものを結んで初めて〈仲魔〉となるのか。今は検証すらできる状況にないのが問題だ。下手に検証をしてクラスメートを〈仲魔〉にしてみたい、〈魔人〉との戦いに巻き込んだら目も当てられない。

つまり俺は今後必要以上にクラスメートと仲良くせず、それでいて切磋琢磨し、互いに成長しなければならぬことに……不可能では？  
そもそもクラス内を軽く観察して確認したが、明らかにコミユカの高そうなのがチラホラいる。あれはこちらが深く干渉せずとも勝手に友達認定してくる奴らだ。放電の人や透明少女、件の英語当て字ことアシド嬢らはそんな気配を強く感じる。

いつそ魔人戦に巻き込むのを前提に全員鍛えるか？いや、明らかに



非戦闘系の権能を持つ人たちまで危険に晒す事になるし、こんなクソみたいな運命に道連れにするのは外道の所業だ。世界が今後混沌に飲まれていくのがほぼ確定な中学園生活を送り、更に〈魔人〉という懸念事項を増やす必要もないだろう。難しいかもしれないが、クラス内ではストイックなキャラで通して必要以上に仲良くなるのを避ける方向性で行くしかあるまい。

「お兄様！見ててくださいましたか？」

「八百万か……」

期待の籠った眼差しでこちらを見つめているのはある意味俺の懸念にドンピシャで当てはまる幼馴染だった。彼女は俺の〈仲魔〉に認定されているのか？あるいは……!!

今へマガタマが震えた気がする……！これはまさか、八百万と〈仲魔〉の契約を結ぶか問われたのか？冗談じゃない!!

「お兄様？な、何か問題でも？」

「い、いや。八百万は頑張ったのに俺は不甲斐ない成績だったからな。自分が情けなくて少し気が立っていただけだ、すまない。そしておめでとう、成長したな八百万」

どうやら苛立ちが顔に出てしまっていたようだ。クソっ、ふざけるなよルシファアー!!

いや、落ち着け……まだ確定じゃないが、〈仲魔〉の条件は俺が契約を結ぶ必要がある可能性が高まったんだ。彼女を巻き込む可能性は減ったんだ……本当に？

「わ、わたくしついたらお兄様の気持ちも考えずに自分のことばかり……恥ずかしいですわ」

「八百万は俺に成長した姿を見せたかったんだろ。大丈夫、立派だったよ。俺のことは気にするな、今後成長すればいいだけの話だ」

「流石お兄様！その意気ですわ！」

「お前がさすおにっつて言うのか……」

「??」

真・女神転生で〈仲魔〉になる条件は実は交渉や戦闘以外にも存在する。イベント上一方的に仲間になる悪魔もいるのだ。そもそも八百万相手に契約の有無を〈マガタマ〉に問われたということは彼女自身が〈仲魔〉になることを了承している事を意味している。

何かの拍子で彼女が俺の〈仲魔〉になる可能性は確実に存在するのだ。

「ふふふ、でもこれからお兄様とまたクラスメートになれるなんて夢のようですわ。昔と違ってこれからはお兄様に頼ってもらえるくらい成長したことを見せてあげますわ！」

「はは、今日だけでも十分見せてもらったと思うがなあ」

「いいえ、今危険に陥ろうとお兄様は絶対に私を頼りません。あなたはそう言うお人ですわ。でも私が簡単に危険に陥ることはないくらい強い事を証明できれば、きっとお兄様は私を頼ってくれると信じています」

言葉に詰まる。彼女は俺をよく見ている。いや、八百万は昔から勘が良く賢かったし、周りも見えていた。箱入りとはいえ、聡明な彼女は俺の心の壁を幼いながらに感じとっていたのだろう。結果、こうしてヒーロー育成高校まで追いかけて来たのだ。ある意味、彼女を巻き込んだのは過去の俺の無責任な態度が原因だったわけか……

「八百万、俺が他人を頼らないのはお前に落ち度があるからじゃあない。俺の心が弱いからだ。無理に俺に合わせようとすんな。お前には自分の道を見つけて歩んでほしい」

「お兄様はいつもそうやって誤魔化すんですわ。でも負けません！必ずあなたに頼られるような女性になって見せますわ！」

何を言っても今は聞く耳持たないようだ。

俺はこんな調子で今後のメガテンの破滅の未来と魔人の脅威に立ち向かっていけるのだろうか……？

## 戦闘訓練と覚醒段階

正面に多くの仮装した人物がいる。その姿は変化に富んでおり、老若男女に留まらず、異形の者や人型とは形容できない者まで含まれる。衣装も様々で、機械的な物から戦場には場違いな扇情的な物まである。

彼らに共通点はあまり見られない、ある一点を除いては。皆一様にこちらに敵意を向けている。

ああ。

思わず口の端が吊り上がるのを自覚する。あまりにも無知で愚かなその様に内から溢れる高揚を隠せない。こちらと敵対する理由は様々だろう。明らかに思想も価値観も違う者たちが一時的に休戦してこちらを標的として認定している。ある意味で正しい評価であり、ある意味で無知の極みだ。

互いにいがみ合っているのは決してこちらに勝てないという判断は妥当ではある。  
だが。

まともに連携も取れない者同士で、数だけ揃えば勝てるなどと思われるとはあまりにも楽観的に過ぎる。その証拠にこちらは一種の膠着状態だ。こちらの様子を伺っているのもあるだろうが、同時に隣に居る、普段敵対している勢力を信じ切れていないのだ。真っ先に飛び出した矢先に後ろから撃たれる事でも警戒しているのだろう。

この期に及んで目の前の敵に注力できないとは……危機感が不足しているこいつらに歓迎のあいさつをしよう。目の覚めるような挨拶を。

「……〈地母の晩餐〉」

胸の前で腕を交差し、頭上に掲げて腕を広げると同時に内から湧き上がる破壊の波動を大地を通して開放する。空に向かって咆哮を放った瞬間、自分を中心に足元から放射状に巨大な地割れが広がり、

広範囲に壊滅的な衝撃が噴出する。

こちらの動きを察知して先制攻撃すべく動いた少数の人物は最も破壊力の大きな衝撃派の中心部に自ら突入し自滅した。遠距離から超反応で攻撃した者は無効化された自らの攻撃を目撃することなく衝撃波に飲まれた。助かったのは後方に居て比較的被害の少なかつた者達、全力で後方に回避した者達、そして〈個性〉によって防御を試みて尚且つ成功した少数の者達だ。

確かに最前線に居たのは血気盛んな割に経験の乏しい者が大半だった。だが、あいさつ程度でここまで数が減るのは想定外だ。少し失望したと言ってもいい。

若干の苛立ちを隠せず、腕を薙ぎ払うと視界に映るの全ての者が打撃音と共に吹き飛ばされた。この〈全体攻撃〉はあくまでこの戦場に立つにふさわしい実力者を選別するためのふるいだ。先程の攻撃で実力不足や経験不足の者までこの戦いに参加しているのは明白となった。弱者を庇う為に強者がやられては興覚めもいい所だ。実力が伴わない彼らには大人しく眠っていてもらおう。

数名が連携をしながら複数方向から同時に攻めてきている。しかしこの攻撃そのものは囿であり、本命は此方の隙を突くべく集中している者達だろう。

炎が

雷が

氷雪が

鉄塊が

銃弾が

斬撃が

蹴りが

拳が

有りとはらゆる攻撃が俺を襲う。そして残念な事にその一切がへまがタマの耐性により無効化される。結果的に隙をさらしたのは攻撃した彼らであり、それを逃すほどこちらも甘くはない。足元にMAGを集中すると紫電を纏い始める。そのまま横回転しながら飛び上が

り、蹴りを放つと同時に無数の光芒が放たれる。

「ヘジャベリンレイン」

無残にも光芒に貫かれた者達の多くは傍目にも致命傷だ。運よく軽傷で済んだ者も無視していい。このヘスキルへの副次的な効果は強力だ。発動型のヘ個性を封じる。彼らは無力化されたも同然だ。

こちらの攻撃に合わせて機を伺っていた者たちが一斉に奥の手と思わしき攻撃を仕掛けてくる。ヘ心眼により真つ当なそれではない、理不尽なヘ権能による手段だというのが感じ取れる。空間を削る攻撃、亜空間へと飛ばす攻撃、存在を抹消する攻撃、物質をエネルギーに変換する攻撃、総じて無効化ができないものだ。

勝利を確信した彼らの表情を冷めた目で捉える。彼らは見当違いの方向に攻撃しているのだ。戦闘が始まってから俺の動きの一挙手一投足に全力で集中していた彼らはこちらの術中にあつさりと嵌ってくれた。俺の足運びはヘ原色の舞踏を発動させていた。このヘスキルは距離感や方向感覚を狂わせ、深く術中に嵌れば発狂し、狂人の如く振舞い始める。彼らは精神耐性が高くて軽傷で済んだようだが、自分の不調を自覚できなかつたのが運の尽きだ。

連中のあまりの不甲斐なさに怒りや呆れ以上に興味の損失を感じる。これ以上彼らに時間を取られるのが煩わしくなってくる。

先程からうるさく囁る彼らの言葉にもうんざりしてきた。MAGを乗せ、言葉を発する。

「《黙って跪け》」

瞬間、周囲に沈黙が訪れる。皆一様に驚愕の表情を浮かべ震えている。ああ、しかし。こちらの威圧的なヘ会話に屈するまいと懸命に膝を折らないように踏ん張る彼らに小さな慈悲の心が芽生える。これ以上辱めるのは酷か。ヘ仲魔を作るつもりがないのだから、本来ヘ会話をする意味も意義もあまりない。飽いた故のただの戯れだ。

この茶番を終わらせるべく、右手にMAGを集中させ、弓なりに後ろにのけぞる。力が臨界点まで高まった瞬間、大地を殴りつける。開放された純粋なエネルギーが紫電を放ちながら暴走するように俺を中心にドーム状に広がる。

「ヘメギドラオン」

音が無くなり、周囲が白く染まる。あらゆる存在が消滅していく。どのような個性も、強靱な肉体も、小細工も圧倒的な暴力の前に消え失せる。

光が収まった時、中心部に居た俺以外何も残ってはいなかった。自分を中心に巨大なクレーターができており、人工物も人も生き物も、悉くが消滅した。

脆弱な人間が王に勝とうと驕るのは勝手だが、せめて勝機を見出し、それからしてほしい。策を弄さず真正面から戦うなど愚者にも劣る無謀の極みだ。

クレーターから離れ、ヘメギドラオンの余波で崩壊した建造物の瓦礫の上を進んでいく。ふと割れたガラスに反射した己の姿に意識を奪われる。赤い目をした混沌王が邪悪な笑みを浮かべてこちらを見つめている。

「いい子ぶってないで早くこっちに来ていよ、弱いフリも疲れるだろ？」

・  
・  
・

激しい動悸と共に跳ね起きる。またしても悪夢にうなされ夜中に起きてしまった。最近夢見が悪すぎる。そして夢の内容は全て似

通っている。人修羅としての力を解放した俺が世界と敵対しているというものだ。

切っ掛けはほぼ確実に俺のレベルが20を超えたことだろう。人修羅の持つ潜在能力を扱えるようになってきたということとは、より悪魔に近づいたということなのかもしれない。入試試験で感じた戦闘による高揚感は確実に今後も俺の精神を蝕むだろう、より強い形で。俺に埋め込まれた〈マガタマ〉は人修羅という悪魔を生み出す為の道具ではない。それはあくまで前提条件だ。この呪具を人間に埋め込む真の目的は悪魔の王、混沌王を生み出すことだ。

〈マガタマ〉が肉体面にのみ影響を与えるなど楽観的な考えをしていた訳ではないが、こうも連日似たような悪夢を見続けると、精神にも強く影響を受けていると考えた方がいい。それも、魂の器が成長すればするほど大きな影響を。

覚醒段階という概念が存在する。本来、稀ではあるが一般人が異能者に〈覚醒〉する可能性は一定存在し、異能者となった人間はその後戦いに身を投じて成長していく。そして覚醒した人物の魂の器が一つの限界を超えた時、〈霊格〉が上昇する。所謂魂の覚醒段階が変わり、能力が大きく上昇するするというものだ。

つまり、悪魔の存在を知らずに日常を送る〈愚者〉が何らかの切欠で秘められた自身の資質に気づき、〈異能者〉となり、成長し目覚めし者〈覚醒者〉となる。そして重要なのが、〈覚醒者〉となった人の霊格の成長段階が二つの可能性に分岐するということだ。純粹に人として成長していくか、自らの神性を自覚し神としての姿を取り戻すかの二択だ。

そう、後者の前世の神格を魂の器の成長と共に取り戻し、最終的には人が神に至る可能性。今の俺と非常に似通っているとは言えないだろうか。俺の前世は神などではなかったが、成長していくにつれて〈混沌王〉たる存在に引きずられていくのは想像に難しくない。

例えば戦神アレスの転生者が成長していけば、その勇猛な性格と戦闘能力を得るだろうが、同時にかの神の如く思慮が浅く粗野な面が顔を覗き始めるだろう。最終的に神に至るのだ。あらゆる面が影響さ



れて然りだろう。

この悪魔人間のちゃんぽんのような世界で神格が人に与える影響など調べるだけ無駄だろうが、俺だけは例外だ。明確に人修羅という悪魔の影響をモロに受けている。そして自身が成長していけば辿り着く先は〈混沌王〉以外にないだろう。強く精神を持ち続けければ影響を受けないなどと楽観視できるほど平和な頭をしていない。

俺の成長には明確なリスクがある。幼い頃より好戦的になっている自覚がある。この影響がレベル30を超えた時どうなるか想像もつかない。

強くなる以外に生き残る術はなく、強くなるにつれて人から外れていく。悲劇のヒーローにありがちな設定だが、当事者になると笑えない。メノラーを持っている事が更にストレスを大きくしてくる。

それでも。

死ぬ訳にはいかない。いくつある分からない世界滅亡案件を取り除きつくすまでは……